

3A-82

特 54
676

義 士 銘 々 傳

男「ア、遣つて空く明て置きなすつても誠に無駄でグスから

何うでグス夜な小哥共に貸ちやア被下ませんか

安「貴様お借して何んに爲る

男「此道場を借して賭奕を爲るんで其處で貴郎が傍に座つて居

て呉れ、ば文句を云ひに來る奴も無へやうな譯なんでグス

が何うでグス貸てお呉んなさいお割合を進げ升せ一杯飲め

まさアね
安「夫りや酒ぶ飲めれば仔細は無いがじやア兎に角昔な連れ
て來るが好い
其所で大勢蕩樂者が寄集つて博奕を爲る傍で酒を飲乍ら安座
ア搔て見て居るが何んぞか譯が分らないから遂に手枕で寝ち
まうサア寺口も分らぬに滅茶苦茶に成る遂々借金が高んだか
ら借債の抵當に道場を差出して家主に話しを爲て裏店の突詰

義士銘々傳

りの家を借込んで中山安兵衛寓居と云ふ門札を立て是からと
云ふものは教へる弟子は來遊び三味ハア何うも吉原へ這入
り込んでグレテ歩いて居るがモ一吉原でも錢は無し八丁堀の
赤鞆の浪人が來たと云ふと鼻ア摘んで袖曳く者も無い此節安
兵衛脇差も賣拂つて仕舞つて關係六の刀ア一本打込んでブラ
付て居る近所の酒屋でも安兵衛は札附だから貸て呉れる者が
無い其故好きな酒も飲めない安兵衛工風を爲て喧嘩を發見け始
めた胸倉を取合て喧嘩ア爲て居ると其處へツカと來て
安天下の往來で聲高に争論を爲ると云ふのは怪からん事大
方朋友だらう聊かの間違ひから起つた議論であらうから
………サ日本は兄弟だ誰も他人は無い乃公も貴様達の兄弟だ
から交情を直せ和睦を爲ろ乃公が仲裁を爲るから………
と喧嘩ア連れて料理屋へ昇つて自分の喰てへ飲てへ物を誂へ

義士銘々傳

て大概酔た自分にブーイと居なくなる詮方が無いから喧嘩同
士が勘定を爲なけりや成らない始りは其奴ウ喰たが評判に成
て來たから喧嘩ア爲て居る處へ横町からビヨイと顔を出すと
喧嘩同士が左右へバラと逃げて仕舞ふ喧嘩斗りぢやア飲
足なく成りましたから葬禮を發見け始めた葬禮を發見ると跡
へ尾て寺へ往つて酒を飲むと云ふイヤモ一怪からん處の亂暴
狼藉此方は菅野六郎左衛門は青山へ來て指南を爲て居ると次
第に御弟子が殖へると云ふのは六郎左工門は腕前斗りか禮義
が厚くして誠に子供を仕立てるのが上手左京様に村上庄左衛門
と云ふ武藝者があつて弟を庄九郎と云ひ元上總大瀧の郷士の
悴………兄弟共劍術が好で江戸へ出て來て番町蛙原の中津川
雄範と云ふ一刀流の家元みたいに相成て居る大先生此家に兄
弟とも内弟子に這入りました金満家だからドシク藝古料る

義士銘々傳

來る故贅澤を極めて劍術を修業爲たんだから何うも名人と云ふ譯には行かんが可成腕が出來る處で手藝を求めて松平右京太夫殿へ兄弟共百五十石で住込んで居る此人は元來郷士だから百五十石の扶持に成たのを此上も無い手捌と思つて居るに由り何分肩で風を切る傲慢の性質が有る其故心有家老達は家傳は菅野の方へ預けた方が宜かるう弟子は師匠を見習ふもので那の傲慢の師匠を見習つたら定めて詮方の無い忤が出來るだらう菅野の方へ遣はしたら武藝は兎も角菅野の性質を見習へば幾分か徳が有るだらうと云ふ處で村上の弟子が菅野の方へドンノ入門をする追々庄左衛門の道場が淋しく成るから村上兄弟が残念で堪へられぬ

義士銘々傳

つて來やうと思ひましたから村上菅野方へ他流試合を申込むと六郎左衛門が六「イヤ夫れはお断わり申す斯う遣つて三万石の家に互ひに温和く爲て居れば何方も劍術の先生で居られるが試合を爲れば何方か勝何方か負るに極つた話し負ければ當家に居られんど云ふ事に成るから御同然の身の上に係る事且拙者は老人で御坐るから試合を爲んでも負るは分つた話し只拙者は劍術の道を御若人に教へるのが役で御坐るから試合の儀は御勘辨に預りたいと先方から依頼つて來るのを風に柳と相手に成て呉れんから庄左衛門は愈々業を沸して出來ないのだが世辭退從が旨いから家老用

義士銘々傳

十四
人番頭へ出入つて昔弟子を取られたのだから何ぞあらば傲
慢の鼻を挫き三万石へ一人で翼を伸す工夫を爲ねば成らん
と二六時中其事のみを老へて居ると御家老の浦田主計と云ふ
人の惣領鐵五郎殿が元服の祝ひを爲る何爲る當時羽の利た御
家老の息子が元服で御坐いますから一家中から祝ひ物がドン
／＼参ります當日は家中一同を招待爲て御馳走と云ふ事で六
郎左衛門は當時の師匠だから勿論庄左衛門兄弟も先の師匠だ
から全じく招かれました却當日に成ると庄左衛門鳥無き鳥
の蝙蝠とて座敷の上座を占て相變らず傲慢な話しを爲て御酒
が始つて居ると遅れて菅野が出て来て玄關へ掛ると
家來「サ、菅野先生御出で、……」
六「大きに色々用事が御坐つて遅なりました今日は御日柄
も宜しく御芽出度ふ存じ升

義士銘々傳

鐵五郎が出て来て
鐵「サ、先生能く御出で下さいました
六「是れは鐵さん若衆姿は愛らしく御似合だつたが墨を御入
れ被爲たら亦一層……一角の豪傑の様に見受るイヤ誠に御
芽出度う存じ升
此聲を聞いて飲んで居た若侍が二三人飛出して來まして
若侍「イヤ是れは先生サ此方へ……」
と手を曳て坐敷へ行く村上は禁物お奴が來たと思ふが何うる
詮方が無い禮儀だから
庄「是は菅野氏サ、御自分の席は是れに明けて有るからイヤ
此方へ……」
と自分の坐つて居た座へ掘やうと爲る
六「是れは痛み入り升何卒先生此方へ……」

義士銘々傳

庄「イヤ、和郎の御席は此處だから
と席争ひを爲て居る處へ主計と云ふ主人が出て来て
主計「イヤ夫では村上が困る先づ其處へ……
と云はれ六郎左衛門も主人の指揮だから止む事を得ん
六「然らば御免を蒙る……
と菅野が上席へ直りました庄左衛門腹の中で思ふには
庄「夫では村上が困ると云ふ處を見ると家老の鑑定でも一は
菅野二は村上と吾々は六郎左衛門より下に見られて居るに
相違無い賊に残念な事だ
と思へは愈々庄さんお酒が旨く御坐いません夫れに其處に居
る十分の七は菅野の弟子ですから先生々々持咄され村上に
構ふ者が御坐いませんからハヤ其席に居堪れなく成りました
庄左衛門立て弟を呼び

義士銘々傳

庄「乃公は此席に居堪らん全躰挨拶を爲て歸るべきだが止め
られると歸り惜いから乃公は挨拶を爲せに歸るから兄は少
と不加減て御免を蒙つたと云つて貴郎は迷惑乍ら酒宴の終
るまで此席に居て呉れる
弟「宜しう御坐い升……
庄左衛門刀番の所へ来る……皆な御客が侍だから酌酎を爲て刀
の間違つては成らんから刀番と云ふのかある玄關口で来る御
客の刀ア預つて間違ひの無いやうに下緒の處へ札紙が附て並
んで居る村上が刀番の處へ来て
庄「御刀番鳥渡中座を爲たいから刀ア出して呉れるやうに……
刀番「先生の御刀は何所か知らん……
と刀番が探すのを待てヒヨいと前を見ると菅野が後から来た
爲一番口許の所に菅野様と札が附て出て居るから夫れが目

義士銘々傳

注た

庄此刀ア菅野のか

刀番「左様……」

庄「鳥渡……」

と云つて庄左衛門が取上げて見ると誠に軽い鞆くるみ辛う二尺位二尺三寸無ければ刀とは云はれない恰て祝差を彷彿も刀て御座い升から小首を傾けて居た村上が

庄「イヤ少々申殘した事があるから……」

と亦立戻つて前の座敷へ來て自分の席へ座ると若侍が

侍「ア先生御小便て御座いましたか先程の御返盃を

と差れたのが好い好機で其所へ座が落付て亦飲始た自分の弟子を三四人見付けて

庄「時に各々方異なふとを聞さまうすやうだが士の嗜みは

義士銘々傳

何んで御座らう

弟子「へエ……昔は弓矢を強く味吟致しましたが先づ武士の

魂と申して昔から今に至る迄士は刀を嗜むのが好い覺悟て

あらうかと存し升テ

庄「イヤ實に仰せの通り士は刀の嗜みが第一で御座る庄左衛

門先頃より誠に好い刀が手に這入らんであつたが過日漸う

に是れあらば上の御奉行も勤まろうと云ふ相當の劍を買入

れました

と云ふ時に弟の庄九郎刀番の處へ往つて兄の刀を持って來たか

ら其刀を受取て庄左衛門が

庄「斯様の劍を帶して居つたらば武士道の覺悟は充分で御座

らう

とギキリト頼拂ひに及んだ穩かき御客が

義士銘々傳

客「ア、困つたものだ。那れだから村上は人望を失なふ酒宴の席上にて白刃を抜くと云ふのは怪からん事だと思つて居ると弟子達は師匠を思ふから格別無禮とも思はんから紙を口へ翳して息の掛らん様に致して蠟燭を近付けて甲「何うも先生是は大した御刀……在銘でケスか無銘でケスカ」
 庄「銘は御座らんか確かに相州の秋廣だ」
 乙「秋廣と申すのは……」
 庄「此りやア其貞宗から後へ出た男で先づ随分高名な男である」
 乙「ア、好い金味で御座る結構な御刀で御座る」
 乙「云つて村上の弟子が稱揚して居る斯う成ると妙なもので酒は廻つて居ると此處が平生の覺悟を見せる所であらうと思ふか」

義士銘々傳

ら

丙「村上拙者の刀も人中へ出しては愧くは無いと思ふ何卒お前は目が利くさうだが鑑定して下さい」
 乙「村上の前へ持て行く村上押戴き矯つ透めつ」
 庄「此刀は好いお刀では何んの某の作であらう」
 丙「御鑑定通り……」
 乙「すると負ない氣にあつて」
 丁「拙者の覺悟も御覽下さい」
 庚「拙者の魂も……」
 乙「取替へ引替へ其處へ刀ア持て來て村上に鑑定爲せる穩か否か」
 老人の御客は
 老「此りやア大變な刀屋の參會が始つたやうだ」
 乙「思つて居ると餘り好く無い刀を持て居る人は自慢に持て來く」

義士銘々傳

る事も出来ないから外へ話しを移して居ると庄左衛門が
庄時に先生(菅野)を差して云ふ貴公の御腰の物杯は定めて結構
なもので御座るぞ苦しからせば拜見を願度い

六郎左衛門が

六「イヤ若年の時分は好い劍を好みましたか當今は追々老る
年當節は素朽身を好んで差します中々御見せ申すやうな物
では……………」

庄「イヤ平生の御心得は御刀に御座るから失禮乍ら是非拜見
を……………」

兄の心を察したと見えて庄九郎何時の間にか刀番の處へ来て

菅野氏と云ふ札の附た刀ア引擔いで座敷へ戻り

弟「兄上菅野氏の御刀は此品で御座い
と云ふと

義士銘々傳

庄「此方へ弟持て來い

六郎左衛門は見せるとも云はん内に持て來たから

六「イヤ無禮千万……………」

だと思つたが

六「ア、今日は祝日酔ては居るし放擲て置け

と我慢を爲て見て居ると庄左衛門取上げて

庄「此りヤア先生大層輕いもの云はば子供の祝差位で

六「イヤモ一唯今も申す通り誠に老人に相成ては腰が重くて

成らんによて好んで素朽身を帶用致す

庄「万一狼藉者に御出逢の時は斯様な素朽身で物の役に立ち

升ものか

六「イヤモ一老人で御座るから亂暴人に出逢ば先づ逃げ升積
り三十六計逃るに如きと申しますから其時は輕いのが好い

義士銘々傳

かと思はれます
庄「万一逃道を失なつた時は如何のもの……」
六「イヤ其時は一生懸命止む事を得走斯様の素柄身でも三人
や四人は切て捨てます積り
庄「夫れは御腕前が確かだ御座るから然もありさうなこと鬼
に角御中身を拜見仕やう
とギラリと引抜き見るとギョツと驚いたのは寸端ではあるが
何う爲て中々の名劍此りヤア世の中に澤山無い志津三郎兼氏
だ云ふのが目が利て居るから一ト目見て分つた
庄「此りヤア先生結構なお刀だ……」が然し太平の世の刀にて
イヤ戰場と云ふ時は物の役には立つまい……イヤ然し有難
く拜見を爲た序だから伺うが間庭念流には樋口先生の極意
で鐵を切ることも瓜の如しと承はつたが實説で御座るか無い

義士銘々傳

あとには有るまいか桶口では矢留鐵砲留鉄切りと云ふのが極
意の自慢……
六郎左衛門が
六「左様で御座る鐵切りの極意は傳へられて御座る父六兵衛
から傳つた極意で御座い舛
庄「ハ、ア拙者も中津川雄範先生から一刀流の極意瓶割と云
ふ術を授かりましたが何んと斯様に御邂逅申すまとも滅多
に御座らんが此處で念流の鐵切りが勝れるか一刀流の瓶割
が便利なるか術を較べたいものだけ先生何んと鐵切りを御
顯はし下さる事は出来まいか
六郎左衛門が
六「イヤ村上先生夫りやア亦餘日が御座らう今日は御當家御
子息御元服の御祝ひ殺伐を含みますは宜しく無い

義士銘々傳

庄是は先生異なことを被仰る荷も武士の悴が元服の祝ひの
席上で武藝の争ひは誠に結構なまど及ばせ乍ら庄左衛門も
瓶割を御覽に入れたる御座る
六「夫れは先生酩酊をして御出なさるから然被仰るので亦餘
日も御座ろう
と云つた時に庄左衛門カラ「と打笑ひ
庄「ア、一、文弱に流るれば追々武藝が廢れる腕前の修業は跡
に爲て巧言令色世辭追従を以て我弟子を奪ふ泥坊劍術山師
劍術鐵切りで御座候と心の中は空に爲て大螺を口に吹き玄
關掃へ斗り立派に爲て多くの人を惑はすいはは是祿盗人だ
と云つてカラ「と打笑ふ練て居る六郎左衛門も怒り心頭を
突てムラ「と殺氣を生じたが主人主計の方を見て
六「ア、一、此處で事を起せば當家の主人が迷惑を爲つしやる

義士銘々傳

事であらう
と込上る怒りを自分で押静めて居る摸様を主計がソロリと眺
め自分の悴の師匠だから肩を持つのが人情で鐵五郎を呼んで
父上が耳に口を寄せて何か呷くと暫く經過て鐵五郎基盤の上
に鐵釜を一ツ載て一人の手を借て二人でツカ「と持出して
來て座敷の中央へ置き
鉄村上先生私元服の日に及んで劍道御流争御兩名の實較へ
は實に悦びと爲る處只今此處へ鐵釜と持參致しました間庭
念流の鐵切り亦村上先生の一刀流の瓶割り見事は是を四ツに
御制下されば金の鎚を以て留め何月何日菅野村上の兩先生
云々、奥書を爲て私子々孫々迄家の寶と爲て傳へるで御座
らう何卒鐵五郎の望みを御達し下さるよう
と云つて席へ着く村上の

義士銘々傳

庄ア、御家老の御嗣子は亦別なものの斯ふ無くては成らん……
：サ菅野氏鐵五都殿の所望是れでも御身は御迷惑と被仰る
か

六郎左衛門が

六ア、是非に及ばん事鐵切りの極意は養父より授かりま
して未だ充分に試みたる事は御座らん然し御所望とあれば未
熟乍ら相勧めまするで御座いませしやう

庄然らば先生御先へ

六宜まう御座います……御一同御酒宴御遊興の中で甚だし
きの失禮然し御當家御嗣子の御所望故止むことを得ん暫時

失禮……
一同イヤ先生是非拜見を
と席が寂寞と爲た六郎左衛門は襟元寛いで片衣は脱て袴斗り

義士銘々傳

成て居たから其儘立て下緒を禿と爲し志津三郎の素朽身の銘
刀をギラリと引抜き碁盤の前へヒタリと上段に構へ名々如何
あらうかど心耳を澄して見て居ると暫く經過て菅野は

六ヤッ……

と一聲切下して來たサツリと音の爲た斗りで霞釜が躍りも爲
老に碁盤に附たなりでサツと切れた六郎左衛門

六如何あらうかど存じましたが先づ鐵切りは斯う云ふ盪梅

のものです御座る

見て居た人々が

一同成程……

と云つたがゑらいとも感服とも稱揚る者が無い是が感に絶る
と云ふ奴でイヤ感心とか恐れ入つたとか御天陽様だとか云ふ
のは御世辭に稱揚るので御坐い升鐵五郎が

義士銘々傳

鐵「イヤ實に恐れ入りました此上からは村上先生四ツに御渡
し被下れば直襟金のかすかひを以て留め升からサ四ツに御
渡し下さい

庄左衛門も遣らぬい譯に行かない

庄「各々方私も失禮仕る

と同しく釋を十字に絞取て相州の秋廣と誇つて居る重ね厚を

ギアリと引抜き大上段に振被る

甲「此人も切れ升せ背は高し青髭があつて好い人物菅野先生

は刀は短かゝつたが刀は長し何方がと云へば先づ村上を抱

へる美事切れるで御座りませう

と目を剝出して一同見て居ると前に菅野に旨く遣られて居る

から自分が切り損なつちやア此上も無い耻辱と思ふと自らブ

ル「刀の先へ震へが来る懸て好い處を見澄して

義士銘々傳

庄「ヤッ……

と打下して来て其霞釜をガチャリ叩くと疑があるのに腕がさ

のみ名人と云ふ程で無いから其霞釜がッシャノと殴れて仕

舞つたスルと菅野の弟子が大勢だからドツと手を打て笑つた

或は嘲す者がある

乙「何うも名人下手は是れで知れた者で菅野は名人て無いか

ら僅た二ツ村上先生は遙かに達人なるが故に其數限り無く

イヤ實にゑらい者で御坐る

と席中ドツト笑つて仕舞つた中に

丙「イヤ此りや何んでげせう村上先生は思遣が有る御方て

丁「奈是……

丙「鉄五郎殿が御元服なされば間も無く御内室を御貫ひなさ

る其内室が御元服被爲の直く漿水を含まなければ成らん其

漿水の中へ入れる鉄屑を茶の湯の釜で拵へて下すつたんだ

一同「イヤ然うかも知れん

丁「鉄五郎殿の云はれるには金のかすがひを以て留ると被仰つたが是ぢやア留やうも御坐るまい名人の鑄掛屋でも尻を端折て逃るで御座らう何爲る村上氏は名人だ達人だ……

と嘲されし庄左衛門ガーンと耳が鳴て逆上爲て其帯に居られんから遂々逃歸る爰で翌日から村上方に稽古に来る者一人も無くなつて仕舞つてモ一此屋敷には居られんと弟庄九郎を連れて青山恩田松平右京太夫の屋敷を逃げ番町の中津川雄範方へ来て兄弟身軀を震はせ菅野に耻辱を與へられた始末を物語る弟子の耻辱は師匠の救はんければ成らんと中津川雄範兄弟菅野と果し合を爲ると云ふ事になり其處に居合した小野小源

義士銘々傳

義士銘々傳

第七十席

太金子市内栗橋小彌太を始め外二名も加擔に及ひ菅野老人の方へ眞劍果合狀到來……助太刀は中津川兄弟外居合したる五名以上七名場所は高田の馬場ア、侍道の悲しさには跡へは退けぬ梓弓菅野六郎左衛門高田の馬場へ出て多人數を引受け手詰の勝負に及ぶ中山安兵衛馳付けの助太刀と云ふの件り次回

村上庄左衛門満座の中で已れより恥辱を惹出し流石に屋敷にも居られず弟庄九郎を連れて夜逃げ同様青山を出て師匠中津川勇範方へ來り涙を流して有葉有枝の物語りを致す師弟の情合は亦別なもので勇範不慙に思ひ
勇「然らば果し狀を送つて六郎左衛門を打果すの外道は有るまい及ばせながら勇範助太刀に及ばら……

義士銘々傳

と受合ふ折しも其場に閉合して居た一門弟
門弟私共も兄弟弟子の事であるから及ばせ乍ら腕を貸さう
命を捨てやう……

と云ふのが戸川伴三、栗橋小彌太、金子市内、一刀又六杯と云ふ人
物其處で庄左衛門が果し状を認め、其處に居たる小野彌源太
を使に頼んで菅野六郎左衛門方へ書面を送りました處が恰好
六郎左衛門は在宅を爲て居つたから取上げて見ると村上庄左
衛門全じく庄九郎の名前で有る怪しみなるら開封を爲て見る
と過日家老職宅に於て出會を致し其節思はぬ恥辱を蒙むり無
念遣る方無く一刀流の羞由て師匠中津川勇範を後見に立て明
二十二日高田の馬場に於て眞劍手詰の勝負に及びたい御出向
さ下されたいと云ふ文言は流石に庄左衛門魂を砕いたから
能く出來て居る六郎左衛門是れを見て太息を吐いて

義士銘々傳

六「ア、一 Cheng 捨つべき物は弓矢なりけり今更武藝を以て仕
官を爲て居る拙者後へは退けん是非に及ばん

と承知の返書を認めて使ひの者を返す爰で其夜は勇氣を練て
翌朝例刻に起きて漱ひ使水も濟んで朝飯を喰べて机に向ひ朝
の中山安兵衛へ宛てたる一封を認めて熊田又次郎と云ふ左京
太夫へ住込んでから召抱へた實直々々敷い若黨を呼んで

六「貴様此書状を以て松屋町の安兵衛の處へ往つて呉れ此使
ひに少と誂へがある往きを徐々往つて安兵衛に書面を手渡

し爲たら歸りを急いで來て呉れ
又「畏まいるました往きを急ぎまして歸りを徐々……

六「イヤ違ふ往きを徐る、歸りを大急ぎ……

六「歸つて來たら此處に亦一封書面がある机の抽斗に入れて

義士銘々傳

置くから此書を後當家御目付朝倉源内殿宅へ届けて呉れ順
序を忘れては成らん好いか
又「畏まいました」

と又次郎は

又「妙な使ひがあるもんだ往きを徐々を急いで呉れ……」

ハテ合點行かん夫れに今朝は主人の顔色が好く無い何か心

配事と見ねる何爲る主命で詮方が無へ……

と仕度を爲て又次郎は八丁堀へ出て来る

又「ア、好い鹽梅に安兵衛さんが家に居て呉れば好いが留

守勝な人で困るな居ない……」

然う思ひ乍ら程無く八丁堀松屋町へ来て裏を這入ると中山安

兵衛寓居と云ふ札が出て居る九尺二間の裏店固より取られる

者も無い戸が閉つて居るから手を掛けて曳くと戸締りか悪い

義士銘々傳

から譯無く明く

又「御免なさい……」

と這入つて見ると無人島人影か無い煙は二疊斗りつさやア延

つて居ない跡は根板の上には菰が敷て有ると云ふイヤモ一何

うも竹の皮杯か放つて有つて無用心千万那方に一塊り此方に

一塊り積んである五合徳利酒樽の類が方々にゴロく轉つて

居る何んにも道具は無心が臺所の處に水瓶が一ツ珠勝に置て

有る又次郎覗いて見ると何日水を汲んだのか汲置きに成て居

るから「ア、不在で困つたもんだ

と思ふと隣家でビッヤ音が爲る覗いて見ると糊賣り婆ア

さん穿で稼ぎ一方と云ふ金溜め主義の婆アさんが頻りに糊を

持へて居る

傳々銘士義

傳々銘士義

又「お婆アさん過日は……」
 婆「チャ又次郎さん御口しう……青山の先生には御變りは無
 いかい
 又「先づく御壯健……」
 婆「夫りやアマア結構
 又「お前さんも達者で好いねへ
 婆「眞實に達者なりなのさ……」
 又「時に安兵衛さんは……」
 婆「安兵衛さんには眞に眞に困り切り升此節は滅多に家へは
 寄付かない近所の酒屋ぢやア懲々爲てお酒を貸さないもん
 だから和郎喧嘩を見附けて歩いて喧嘩があるよ云ふと無理
 に仲人をして料理屋へ連込み自分の好きなお肴とお酒を誂へ
 て好い頃酔た時分に喧嘩を置去りに爲て逃けて仕舞ふと云

ふもんだから八丁堀の赤鞆と云ふと人が皆んな知つて仕舞
 つて喧嘩爲て居ても安兵衛さんの姿を見るとサツサと喧嘩
 が逃げちまう其所で此節では喧嘩斗りぢやア飲み足りない
 と葬禮を追つ馳けて歩きお寺へ往つて臺所へ道入り込みれ
 酒を飲んで歸ると云ふ實に青山の先生の甥ッ子に那んな碌
 で無しが出来ると云ふのは何う云ふもんだらう夫れに聞て
 お呉れ頃日私が一生涯懸命に稼いで御法談を聞に行く時の暗
 着の衣物を一枚拵へたスルとモ一安兵衛さんが目掛けて何
 卒婆ア其綿入れを貸て呉れる鳥渡質に入れて青山の叔父の
 所へ土産物を持って金子を算段して呉ると早速受て返す貸せ
 くとお呉れヨと私に思ひ切て其綿入れを貸すと質に置く所ぢ
 やア無い恰好路次を這入つて來た紙屑買を捕へてハツタリ

義士銘々傳

に賣たいらうぢやア無いか眞に詮方が無い
又「ね婆さん、和女の御話しも聞て居たいが心に掛る事がある
御届けの手紙だが御不在で詮方が無い何卒御歸りん成たら
忘れずに手渡しして下さるやうに……私には気が急ぐから此
儘歸り升から……」
婆「ア、好いヨ一商ひまで来た時分に恰好安兵衛さんが戻る
かも知れないから何卒何分御願ひ申す
と婆アさんに手紙を懸んで青山へ引返して来る此方は六郎左
衛門八丁堀へ使ひを出して置いて身仕度及び左京大夫御居間
の方を向つて他事乍ら御暇乞を爲て編笠を被り青山の屋敷を
出たが青山から高田の馬場と云ふと中々道敷がござい升るが
六郎左衛門焦らせ急がせ悠々道歩いて参つたのは元祿五
年十月二十二日と云ふ誠に好いお天氣でスルと高田の馬場じ

義士銘々傳

やア朝早く高田の馬場の傍へ茶見世を出して鬼子母神へ参詣
の人を相手に其日の活計を立て居る者がある此時分高田の馬
場にはお馬の稽古があつて一六とか二七とか云ふ日に馬の先
生が弟子を連れて来ては教へる尤も一月に何日と云ふ極りが
ある茶屋の爺イが高田の馬場を見ると云ふと今仲間が来て暮
を張てる
爺「イヤ婆アさんや張幕りが出来たが今日は稽古日か
婆「イヤエ今日は何んにも有る日ぢやア無いヨ
爺「ぢやア大方臨時に數矢でも被爲るを月の方の何んだらう
から……お茶ア入れて煙草の火を持って行かねへと拳突を喰
ふ……
と云ふのは馬や弓の稽古の有る度々に此茶見世から火を持って
往つたり茶を持って往つたりスル此れは年分に如何程と云ふ茶

義士銘々傳

見世の内職に成てるんだから婆アさん煙草の火と土瓶を提げ
て幕の中へ這入り
婆今日は何かなんでござい升か弓の御替古でも御坐い升か
と云ひ乍ら見ると御膳籠の傍に燗銅壺があつて酒肴の用意が
充分出来て居る
仲間貴様達の火を貰ふにやや及ばねへ此方に火は澤山有る
から要らねへ然んな不味い茶なんどは飲めるものか今日は
弓のれ稽古處ぢやア無んた此處で今命の取り遣り……武士は
同士の果し合が始る乃公達は番町の中津川勇範先生の家の
者だ火も茶も持て行けく
婆ハイ……
イヤ婆アさん膽を潰して歸つて来て親爺に話すと
爺ナニ命の取り遣り……夫れは大變だ……

義士銘々傳

と茶見世の夫婦が觸れて近所を歩いたから物見高い江戸で
みるから
甲「ソレ命の取り遣り……果し合だ見に行けく
と二丁或は三丁十丁先から吾れもくど見物に出て来る此頃
は今の堀の内の様子に鬼子母神が行なはれて居る神にも流行
りは有るものか大層日々参詣が出る其参詣の人迄が此處へ引
掛つて流石に高い馬場の周囲をグルリ見物が取巻いて仕
舞ひ
甲「未だ相手は來ねへのか何う爲たんだ
乙「左様さ……向ふに慕張りが出來たんだら此方にも慕張り
が出來さうなもんだ敵と味方が一ツ慕張りと云ふのは乙な
と云つて居る
鹽梅だ……

義士銘々傳

丙「何んだい、權さん
權「マア御覽なせへ是れから此處で雙方二十人位宛の人数で
果し合が始るんだ
丙「へエ……………二十人宛……………」
權「ア、
丙「ぢやア何んだ少々な戦争を見るやうなもんた
丙「マア然う云つたやうな勘定……………」
と云つて居る其處へ六郎左衛門が焦ら急かすつかく遣つ
て來ると何うも黒山の様に人が集つて
甲「ソレ切合だ
乙「果し合だ
ソイツツツと云つて居る六郎左衛門が
六「ヤレ、人の愛へを好むと云ふ正無き人が多いものだ

義士銘々傳

と苦笑ひを爲あがら
六「コレ、少々退て呉れ少々許して中へ入れて呉れ
丙「チ、累卵へ……………脇の下をくすぐつて……………チ、老人の
れ侍だモン、御老人然う前へ出ちやア累卵うござい、外武
藝者の眞劍勝負があるんで前に居て怪我でも被爲ると不可
ねへ
六「イヤ老人と思つて心添大さに辱け無いが私が出なければ
此果し合は始らんのだから何卒退てお呉れ
丙「詰らねへ事を云つて和郎さん考髭して居るね
と云ふ内に六郎左衛門人を押分けて高田の馬場へソツくと
這入り込む那の方を見ると慕張りか出て内にな多くの仲
間姿を爲て居る者が居る六郎左衛門是れを見て打笑ひ乍ら大
木の松を小楯に致して

六「ア、此りやア一年を老れば僅の道も大儀である
と云つて安座を擡て腰から扇を拔出し十月の末ではあるが歩
いて来れば小春和日汗を催すと云つて肌へ風を入れて居る見
物は

甲「何うだい那の爺さんは那方へ今戦ひが始らうと云ふ處へ
出て累卵へ事た愈々老髦して居るんだらう
其處へ深切な者か出て来て

乙「モッお武家さん今此所で切合が始るんだ怪我ア爲ると不
可ない片ツ隅の方へお寄ん被爲たら宜からう
六「イヤ度々注意をして呉れて辱け無いが實は俺が其武藝の
遺恨で果し状を着けられて今日生命を捨て是れへ出向て來
たのだから拙者ゝ此方に居らねば勝負も出來んのだから……
……深切は悦ばしいが乃公は當人だから心配を爲るには及

ばない
乙「へエー和郎さんが切合を御遣んなさる御當人でゲスか
六「左様……

乙「へエー……餘程のお年で……

六「俺はモ一六十三だ
乙「へエー和郎さん其喧嘩を仕掛けた方か仕掛けられた方で
すか

六「六十を越た老人何んとして荒い勝負と好まうぞ先方から
仕掛けられたのだ其故是非に及ばんから此處へ出向て來た
……

乙「和郎さん喧嘩を仕掛けられた方かへエー……コゝ権
さん和郎さん先刻二十人同士で切合を始めんだと云つたが那
方に安座ア擡てる爺さんが切合を爲る相手だ

義士銘々傳

權「へエー
乙「シテ見ると幕張りの方も若かア有るめへ矢ッ張爺さんだ
らう……七十位の爺さんが六十三の爺さんを相手に切合な
るから片手で腰を叩きセイ云ひ乍ら今日は呼吸切れが爲
丙「然んな事が有るかも知れねへイヤ此ちやア大きに張込ん
ど氣も抜けて仕舞つた
と云つて落膽して居る彼是れ其日も四ツ時分に相成ると後ろ
でッーッワツと云ふ聲が聞へる
侍「退た〜
と見物を押分けて高田の馬場へ乗込んで来る同勢は凡そ十二
人尤も侍が七八人にして跡は仲間体の者で先づ第一に中津川
勇範、村上庄左衛門全しく庄太郎、一刀又六、小野彌源太、金子市内

義士銘々傳

栗橋小彌太、戸川伴三、皆可驚い打拵で大小を打込み武者袴を穿
ち草鞋を穿て大手を振て乗込で参つた有様は實に争ひ難く
相見えました是等はワロ〜幕張りの内へ這入つて仕舞ふ見
物が一同
甲「何うだいはれが片相手だど此方は恐ろしく若い者が揃
つて威勢が好い片ッ方は那んな老人……何んでマア斯んな
折合に合ねへ喧嘩が始まつたんだろうねへ權さん……
權「然うさ面白くねへ暇ひだ相手が七八人で見ると始る直に
爺さんが殺られて仕舞ふ何んで斯んな格外な喧嘩が始まつ
たんだか理由分らねへ
と愈々噂だら〜て見て居ると中津川方では一休息入れて勇範
が
勇「那れに編笠を被つて居るの敵の六郎左衛門か

義士銘々傳

庄左様で……
勇流石に一人で出向さしは腕に覺への有るものか……サ兄
弟兩人で充分手詰の勝負に及べ危く相成たら御一同が手を
貸て下さる
二人委細承知……
と村上兄弟身輕の拵打で藤張りの内より悠々と立出で六郎左
衛門の右左りから詰寄て來る敵が此方へ來たと思ふから六郎
左衛門もやそら姿を改めて松の大木を小楯に取たのは相手は
大勢後ろより廻られては不可んど思ふから老人は松の木を小
楯に致しスツクト立上つた菅野六郎左衛門サア來いと云ふ光
景村上兄弟是れを見て
庄ヤ一く珍らしや菅野六郎左衛門過日青山の屋敷に於て
測らるも不覺を取り無念骨髄に徹し果し合を望みし處能く

義士銘々傳

も出向れしサア眞劍勝負は一刀流が便利なるか間庭心流が
速かなるかイザ尋常に勝負を決すべし覺悟致して此處へ來
られヨ
と詰寄た時に六郎左衛門カラと打笑ひ
六庄左衛門庄九郎の兄弟能く聞れヨ青山の屋敷に於て不覺
を取られたは畢竟御身の不熟の爲す處是れ逆怨みならせや
一刀流は眞劍勝負に他人の力を借りか知らんが間庭念流
は人の力と借るに及ばせ吾れ一人にて相手に及ぶ又覺悟と
呼ばれたれど固より覺悟の上此處へ出向さしなり今改めて
覺悟と云はれるは武士の要らざる重言相手は最と大勢一人
々々は面倒だ一緒に掛れ村上兄弟
と呼ばり乍ら被れる笠を後へ捨て居る羽織をかなぐり捨
れば下は覺悟の自襟……備前の細身をスラリと抜き一すぶさ

義士銘々傳

すふいて
六「イヤ来い……来れ……」
と身構へに及ぶ村上兄弟は重ね厚の強刀を引抜き右より
詰寄て来ると思はせ見物
一同「ワッ……」

と涙の寄せるやうに聲を揚げた其内に庄左衛門庄九郎左右か
ら大勢の後見があるから鉾鋭く切込んで参るのを六郎左衛門
六「心得たり」

と引受け丁々發矢と切結ぶ六郎左衛門覺えた丈けの念流の腕
前を今日此處へ顯して右より左より切込んで来るのをば受
つ流しつ切結ぶ老人なれども覺えるの技倆の爲に庄左衛門庄九
郎僅の間に受太刀と相成り酒に酔た人の如くに切立てられ將
に遠からん内に兄弟の者に大怪我が有るべき摸様が相見え

義士銘々傳

幕を立出で、檢分致して居つたる勇腕舌を巻き
勇「不思議の名人もあればあるものか村上兄弟の命危うし各
々助勢々々……」

と呼はれば
一同「心得たり」

と天下泰平の侍に成て血を見る事能はさるは無念と云ふ日頃
から荒きを好む小野彌源太、金子市内、栗坂一刀の人々バツ
くと慕張りを飛出だして参る

一同「アイヤ菅野氏義に由て村上兄弟の後見に立たる吾々御
覺悟あれ」

と亂打に打込んで来る六郎左衛門逆も無き身と思ふから
六「大勢程が面白うイヤ来い來れ」
と六郎左衛門猿臂の面影飛鳥の山間虎亂入龍の勢ひを虎の威

義士銘々傳

勢、問庭念流の奥の手を振ふて必死と成つて居る猶此大勢で六
 郎左衛門に薄傷を負する事が叶はん見物が
 甲「何うてグス危ふんだ御老人が強い事を云ふものは……此
 方の奴は大勢で居ながら意氣地の無へ奴等ど……ヤ！御老
 人美事勝てお呉んさせへ弱いのを助けるのが日本の氣象だ
 首尾能く勝てお呉んなせへ愈々危ふけりやア私が敵の奴等
 ア此手斧で片ッ端から丸太同様に切て切て切り巻つて進げ
 升
 と仕事の出掛けに此所へ引掛つた大工さん手斧を振廻すから
 邊りの人が
 甲「ア、累卵い和郎さん然んか物を振廻して私共の首をチヨ
 ン切られては大變だマア、これ靜に被爲まし

第七十一席

義士銘々傳

此時濡れ手拭ひをはたくやうな音が致すと一刀又六と云ふ若
 侍が左りの肩口から乳の下掛けて切付けられ倒れた儘深傷で
 有るから起上る事が出来まい口をもがく遣つて足を震はし
 て苦しんで居るのを見ると泰平侍の悲しさには是れを見ると
 皆悻然と爲て
 一同乃公達も切られりやア那の苦しみを爲さければ成らな
 いだらう
 と大勢の方が受太刀に成る六郎左衛門は思はせ相手の退るを
 見て知らせ職ら迄松の小楯を離れて大勢を退捲つて隙があれ
 ば亦片ッ端切て捨てやらうと云ふ意氣組み中津川勇範一刀又
 六を一人打たれたのでサア何うも氣が氣で無い是れから身仕

義士銘々傳

度に及んで仲間供に羽織を脱いで預けると直に請取り襟を十字に綾取り九尺柄の手槍輪を拂つて戦ひの方へ突出すかと思ふと左に非らず見物の夢中に成て居る先へ九尺柄の槍をスバツと出す見物思はず

一同ワツ……

と云つて大浪に崩れるが如く其處丈け穴が明く崩れた間から勇範は出て仕舞つて見物の後をグワツと廻つて六郎左衛門が真後に當る見物の首と首肩と肩の間だく拔身の鎗をバツと突出す

見物「ワツ……」

と云ふて是れ亦亂れる其人の半を割て馬場へノツくと這入り込んで槍へしごきを入れて中段に構へて六郎左衛門の後へツ、……と進んで来た今勝負が勝ちに成て隙のある奴を切て

義士銘々傳

捨てんと進んで行く見物は大きに驚いて氣を揉む事か見物「ヤ、那の大坊主が老人の後へ槍で廻つた……ヤ、老人の後に敵がある槍を持って居るぞヤ、後を氣を注げなければ不可ん

乙「モシ御老人御氣をお經けなさい槍の坊主が廻つた

ワ、ワツワツと鯨聲を揚げて騒いで居る一人で云つて呉れ、ば六郎左衛門の耳へも這入りましたらうが大勢でワツ、と云ふのだから六郎左衛門の耳へは何を云ふのだからさつぱり分らない唯ガーンと聞へる斗りだ然なきだに前に多人數を引受けて居るから中々聞分ることの出来んのは道理千万チャット前に構への付た處から中津川勇範
勇範「勇範未練と笑はば笑へ弟子を損じさせない爲である……」
と云ふて勇範後から

義士銘々傳

勇「ヤッ……」

と云ふと突出した槍先は電の如く何かは持つて堪るべき腰の傍から下腹へ掛けてプッ！貫いた

六「アッ……」

と魂消る聲を揚げて倒れんと爲る處を前から切込む六郎左衛門は唯

六「無念……」

と一聲菅野先生勇範の抜た槍と諸共に大地へド！ト倒れて果敢無き最期に及ぶ村上兄弟雀躍して

兄弟「ヤ！果し合には勝たるぞ褒めろ！」

と云ふ時に一同の者は

一同「ワッソ……」

と鬨を作つて勇むと見物が

義士銘々傳

甲「ヤ！然んな卑怯な事をして勝たのが何が自慢だ籠棒奴……」

乙「物も云はず後から欺討ちと云ふ斯んな勝が何んに成るものか白痴奴……馬鹿奴……」

丙「卑怯者め……」

と嘲る者が多い褒める者は一人も無い威張て居た大工さんが大工「ア、人間は脆い者だ那れ丈け強い老人が僅一鎗でモ一空しく成て仕舞なさるア、人の命は斯方も脆い者か……」

と涙を流して居り升

乙「お前さん先刻御老人が危なけりやア私が加勢を爲るつてちやうなを振廻して居被爲たが大工「イヤモ！私は固より涙つ脆いから腹ア立て居たのも何にも涙に變つて仕舞つた……夫りやア然うとちやうなの頭

義士銘々傳

を無くなして仕舞つた那れが無いと三分取られる……モシ
其處邊に手斧の頭はございませんか
と此中で手斧の頭を探して居る六郎左衛門を切捨放して皆幕
張りの内へ這入るとお仲間が
伸れ芽出度う存じ升
と云ふので爰で御酒がおつ始まつて居ります悦こびの酒宴に
及ぶと云ふは随分憎々敷い舉動……
閑話休題此方は中山安兵衛外をブラ〜遊んで歩いて流石は
家だからブラリと歸つて来た戸口へ這入るが否や下りが町の
處へ手枕を爲て横に成て
安「グー……グー……
と高附糊賣りの婆アさん一賣り賣つて歸つて来て悠々煙草を飲
んで居りましたが

義士銘々傳

婆「チャ大層軒が聞へるが安兵衛さん歸たんぢあア無か……
(覗く)チャ歸つて居るヨ恐ろしく酔つて寝て居る今日はマア葬禮
が澤山目付つたど見へる……安兵衛さんお起きヨ安兵衛さ
ん起きてお呉れヨ叔父さんから手紙が来て居るヨモ、安兵
衛さん
安「ア、……ア、……好い心持だ……水を一杯呉れ……
婆「然んな事を云はせに叔父さんの手紙を御覽ヨ何か心配事
があるらしいからさア……
安「エーイ……叔父の手紙なら酒を飲むなど云ふ意見手紙讀
むにやア及ばねへ……奈是乃公の顔を妙な顔を爲て白眼ん
だいハ、ア頃日綿入れを借つて屑屋に賣た遣恨があるど見
へるな
婆「安兵衛さんが斯んきに酔ふてへのは實に珍らしい好いお

義士銘々傳

葬式が發見つた見へるね
安ナリニ婆アさん聞て呉れ昨夜品川へ女郎買に往つた處が
女郎が大層思ひ付て違引て悉皆酒の御馳走……
婆白痴な事を御云ひ如何に悠氣な女郎衆だつて和郎を違引
て酒を飲ませる奴があるものか
安イヤ此奴は一番當てられた實は婆アさん眞根を吐くかの
モ一近所の喧嘩は乃公を見ると逃出して仕舞ひ不可ねへか
ら昨日は女郎屋の有る品川へ出掛けて行くど流石ア遊女町
花の種の好い喧嘩が二組目付つて少ツスリ酔ちまつて家へ
歸るのがおつくうに成たから品川天王様の堂で泊り込今朝
々湯へ這入ると間の好い時は好いもので喧嘩があつたから仲
裁を爲て澤山酒を飲んで歸り掛けに葬禮を二組目つけて近
年に無く酔ちまつた

義士銘々傳

婆困るぢあア無いか和郎……叔父さんの心も察して少は方
正くお成りヨ
安白痴ア云へ乃公を使ひあなす様の御主人が發見する迄は避
んで暮す清貧を樂しんで居るんだ乃公が思ふやうな御主人
に邂逅して見ろまるで生れ變たや奇人間に成て忠義を盡
す末は必老元師に成るんだ
婆源水に成るんなら獨樂の替古を爲なけりやア不可ましい
安汝なんぞは何にも知らねから無益だ
婆夫りやア然うと何所の國に刀ばかり一本差して居る者が
あるへ赤翰ア一本差して歩くのは見つ共無いか何うにかお
爲よ
婆此りやア婆アさん女房より可愛い關の孫六入道……店賃
か滞つて大家か催促に來る時は金子は無いかから延金で受取

義士銘々傳

れとやツと引抜くとツと云つて逃げて仕舞ふ米屋でも酒
屋でも催促に來る度に此れを抜くと昔な逝げて行く然らば
女房より可愛い刀だ……ドレく叔父の手紙とあれば見せて
お呉れ
と小便を爲て顔を洗ひ寝覺け面を覺し婆アさんの家へ這入つ
て
安「ぢやア婆アさん汲立ての水を一抔御馳走に成らさ
婆「安兵衛さん拘子で飲んぢやア不潔いやね茶碗で飲んでれ
呉れ
爰で安兵衛は取上げた手紙の封を切て酒機嫌酔眼朦朧として
讀下せば這は如何に意見の手紙にはあらで今日中津川方より
斯々申參り逆も後へ退く譯に行んから高田の馬場へ出向た何
うせ命は亡きもの貴様は何卒能き主取りをして中山の姓を立

義士銘々傳

派に立て呉れる跡は呉れくも頼んだぞと云ふ遺言状同様の
書面見るに驚く中山安兵衛忽ち酒の酔も醒めて早速立て帶締
直し彼の孫六の銘刀を提げ尻七の髓まで引擦り一心不乱に高
田の馬場へ馳付けた時はモ一六郎左衛門が果敢ない最期幕の
内では今悦びの酒汲交し見物も崩れやうと云ふ所へ安兵衛飛
込み來つて其場を去らす八人の者を相手に叔父の敵を取り堀
部彌兵衛に思はれて罽入り及びと云ふ安兵衛が二度目の復讐
を爲るのお話し次號に……

第七十一席

高田の馬場を望んで安兵衛駈付けて來る見物はソロく崩れて
歸り升
甲「何うだい何うも入てへ者は丈夫なやうな果敢無いもので

義士銘々傳

六十六
那の老人が大勢を切巻つた時には心持が好つたが一鎗突か
れると遂々ハヤ脆く死んで仕舞つたが那方の方には大勢助
太刀があつて此方は僅た一人……親戚も無いのか兄弟も無
いのか知らん賊に可愛想なもんぢやア無へかなア……
と云つてツロく崩れて来る處へ安兵衛が突然若へ男の邊て、
居るから胸倉を取て
安少々聞度い事がある

若へエ……
安高田の馬場に果し合が有るそうだが……
若へエ今其見物を爲して歸る處でござい升
安一人の男が大勢を相手に……
若然ふでケス今其噂と爲て居る處なんでケス
安如何だつた勝負は……

義士銘々傳

若イヤモ一人の老人だから譯無く負けるだらうと危ふん
で居りましたが其老人の強いこと大勢の相手を引受けて美
事に戦つてお出で、した其上なら老向ふの若へ男を美事に
切倒したんでござい升
安ア、……扱ては叔父上年は老てもア、一技倆は御美事御
美事……
と云つて胸倉を取て居ながら其人を両手で差上げて弄遊ぶ其
人間がヒヨイ廻る
若此りやア難澁でケスなア放してお呉んなさい苦しうござ
い升
安夫れから如何いたした
若スルと和郎さん大きな坊さんが鎗を持って強い老人の後か
ら拔足を爲て忍んだんでケス見居る者が後へ敵が一人廻

義士銘々傳

つたを救へたんでございますが開き取れねへと見えまして
遂々和郎さん坊主の鎗の爲に腰の邊りを突かれたんでゲス
安「ウムー……」

六十八

若「スルと前から雨の降るやうに大勢が切付けて慄然に御老
人は倒れて御最後でござい升

安「ア、イモ一足早かりせば叔父を殺すのでは無かつた何
は爲たれ往つて様子を見やう大さに太儀……」

と云ふと其男と

安「ヤッ……」

と二三間放り出して其儘高田の馬場へ馳けて來て見ると六郎
左衛門は血塗りに成つての最期是れを見るとき英雄なれども情
合に變りは無いから六郎左衛門の空しき屍へ取付て聲を放つ
て男泣き那方を見れば幕が張つてあつて其内に未だ立去りも

義士銘々傳

爲す悦びの盃汲交して居る様子

安「九牛一毛此奴等を其場を去らず討取て叔父の敵を取るで
あらう

と安兵衛刀の提緒を抜取てやをら襷に掛けんといたすと永年
の浪人故提緒も痛んで居ると見えてヒシくと二ヶ所に斷れて
仕舞つた残りが襷に掛けるだけ無い

安「思々敷い……」

と口の内傍に落亂つたる荒繩を取つて襷を掛けんといたした
る時に後に

女「アイヤ御浪士々々々」

と優しい聲を掛ける

安「ヤレ己れ早く敵は後へ廻つたる事か
と中山が回顧つて見ると年の頃四十格好の婦人傍に居るのが

六十九

義士銘々傳

十七八の娘らしい一人供の男が附て居り升安兵衛が

安何事でござるか

女「最前から御老人の御働きを此處にて拜見いたして居りま

したが貴郎が今仰せあるには天地の間の一人の叔父の仇討

と云ふ事を被仰いました最も然もあるべきまど此仇討を爲

被るのに細の禪は不延喜千万でござる御心置きなく是れを

御使ひ下さるやうに……

と傍に居る娘に指圖に及んで腰帶と解して未だ買て間も無い

物と見ぬて新らしい緋鹿の子の腰帶だから色は燃立つやうだ

是れを渡しました安兵衛

安「是れはく真劍勝負の幸先に悦はしい御寸志斯の如くの

場所をござるから辭退無く拜借いたすでござらう心急ぎの

いたし升れば是れにて御免を蒙むると命芽出度き時は改め

て御禮に罷り出でる此御恩は生々世々忘却はいたさん

安兵衛も細の禪の處へ緋鹿の子の禪と來たから大きに幸先が

好かつたど見へて厚く禮を述べ元の場へ立歸り腰帶を取つ

て禪きに綾取る衣類が見苦しい所へ緋鹿の子の禪でござい升

から酷く目立つ見物が

一同「ヤ、緋鹿の子くくく」

と稱揚て居る安兵衛高田の馬場をト、と踐鳴らして

安「ヤ、く幕張りの内に物申さん拙者は菅野六郎左衛門が

天地に一人の羽中山安兵衛雄常にて候流義の遺恨とあるな

れば叔父の仕込みの間庭念流を以て村上兄弟助太刀の方々

イザ此方へ來つて勝負あれ叔父の敵たる汝等は一人も逃し

は遣らん

と呼はつたり一同は幕張りを揚げて打眺め

義士銘々傳

義士銘々傳

甲「ヤ、妙な奴が舞込來つた菅野の甥と名乗つた奴……那れを見給ひ高天ヶ原に狐が付いたか神道者が鈴を忘れたか怪訝奇体の身持の奴なり親爺一人では切足りん幸ひ酒も廻つたから飛んで火に入る夏の虫、何んど那奴を……」

乙「云ふにや及ぶイザ立向はん
勇氣凜々幕の内からペラ／＼／＼吾先きにと馳付けて參り

彌「ヤ、菅野の甥中山某とやら命を商ふ命商人望みに任せ命は申受ける觀念爲ろ

息巻荒く小野彌源太拔手も見せず安兵衛の腦上を望んで切て掛る

安「心得たり

と中山雄常身を變すや關の孫六三本杉

義士銘々傳

安「エ、イ……」

と横つ拂ひに攘つたり途に此彌源太二つに成つて死んだりける

小「是れは何うだ

と栗橋小彌太打込んで來る奴を鋸許でカチツと請止め

安「エ、

と向ふへ突た早業に思はず目眩んだる虚を付込み一足前に踏込んで安兵衛が

安「ヤッ……」

と一ト聲掛けて右の肩先から乳の下掛けてバラリンズンと切掛けられたり何日の間にか戸川伴造中山の後から聲をも掛けおに拜み打ち切込み來る双の風に應變の安兵衛躰を捻つて左に飛ぶと一間ばかり力量に餘つてヨロ／＼と透透く奴を後袈

義士銘々傳

安兵衛の馬場に切つて落す以上三人迄を切たる時は安兵衛の兩足が高田の
ると云ふのは餘程の早業と相見へる是れが爲に金子市内大い
に焦慮つて切込んで來る奴を二三合打合つて居たが安兵衛
安「エイ……」
ど一聲叫ぶと諸共に右の頬から口中を掛けて割付ける逃げる
奴を踊り込んで横ッ攘ひに左の高股から足へ掛けてバツリン
ズン
市「無念……」
ど一聲其處へ倒れる村上庄左衛門庄九郎の兄弟左右から血眼
に成つて切込んで來る奴を右に引受け左りに引受け隙を見て
庄左衛門の横ッ腹へ切込んだ
庄九「アッ……」

義士銘々傳

ど驚いて庄九郎向ふを向たる中山の後から切込む奴を突然回
顧つて庄九郎の肩先深く切込んだり此暇に庄左衛門切られな
がらに起上り又も切て掛る奴を右の手の付根から刀を持たな
り切つて落す、けれども庄左衛門は健か者であるから左りの手
で早くも脇差を抜うと爲る處を飛込んで今度は左の手を切て
落す、劍術使の手の無いのは女郎の手の無いより詮方の無いも
のでござい升、中津川勇範瞬く内に門弟は皆切て落され村上兄
弟さへもハヤ其處へ倒れて仕舞つたから幕張りの内で見て居
りました、酒は忽ち覺めて仕舞ました
勇「モ」此上は乃公が出るより詮方が無い
ど身仕度に及んで居ると此方は見物唯
一同「ワッ……」ワッ……
ど間を揚げて褒めて居る

義士銘々傳

甲「何うだい身拵が汚へから何うあらうかと思つて居たが、
 何んてい早業だらう
 乙「だから醫者の醫者ッ臭へのは未だ上手ぢやア無へ儒者の
 儒者ッ臭へのは博學で無い武藝者の武藝者ッ臭へのは未だ
 腕が出来ねんだ身拵を飾らねへ身拵の悪いだけが劍術使へ
 でも藝人でも上手なんだ
 甲「ハア……シテ見ると和郎杯は大工が名人なんだらう
 乙「奈是……
 甲「何日でも打拵が悪い
 乙「イヤ乃公ア何うも不器用で働きの無んだから詮方が無へ
 安兵衛は
 安「最早敵はあらざる事か知らん
 と幕の傍へ來つて慕張りへ手を掛けて揚げると大坊主が仕度

義士銘々傳

最中、中津川勇範は故意と沈着き
 勇「アイヤ中山某斯門弟を多く打れては中津川勇範も此の儘
 には捨難い不鍛練乍ら弟子の敵蛙原の勇範相手をいたさう
 安「扱ては有名の一刀流の家元中津川が望む處である敵も味
 方も最早一人卑怯未練の働きはよも出來まト尋常に勝負を
 決すべし
 勇「這は面白しイテ相手を仕らう……
 と勇範慕張から踊り出でる見物が
 丙「ヤ、其坊主の鎗で老人を突殺したんだ御若い方確乎遣つ
 てお呉んなさん
 とお節介が関腰を造る勇範は一刀流の無反の大刀を引抜き安
 兵衛は關の孫六三本杉
 双方「ヤッ……」

義士銘々傳

チャツくくくくと此度は御互ひに五分の技倆と見へて立上つたきり少しも勝負が付かん内に中津川勇範充分の隙を見たと見えて

勇「エイ……」

ポソくくくと切返して来る刃表裏を切返して来るから流石の安兵衛少と太刀先が亂れて受太刀と相成り切立てられる

甲「ヤ一若へ方が不可なく成つた

乙「残念だ……ソレ後に死骸がある

と云ふ内に跡透りを爲て来て戸川伴三の死骸に蹴爪突さどト後に倒れました

勇「得たりや應……」

と中津川一振り躍り上つて大上段に搦へ一層力量を入れて勇「ヤツ……」

義士銘々傳

と切て下いたのが天の助け安兵衛の倒れた後に松の木があつて其松枝が風の爲めにユ一下を向て居た其松の枝へ弾みを打て踊り上つて切て来た勇範の刀がスポンと倏つて仕舞つた

勇「南無三……」

と勇範が其刀を抜く處を飛起き様に向ふへ拂つて置て横つ拂ひにサツと思ひ切つて引拂ふ骨切る音が此世の別れ野禪天を着て居た勇範が胴切りと成つて二間斗り離れくドツタリ

倒れるバツと立つ血煙り見物は

一同「ワ……」

と寝める聲は暫く鳴りも止まざる位い、勇範は止め要らず僅た一ッ拂ひの最後、安兵衛もマッくと思はせ後退ること三足四足眼眩んだが眼を閉ちて呼吸を休めて居る處へ大勢の見物を押分けて町奉行から四人のお役人が御出役

義士銘々傳

役人如何なる事で多くの人命を絶たか
と安兵衛を取捲く安兵衛は兩眼を開いて有しり次第を委しく
物語る

う 役人然らば役所へ参られて今一應重役へ申上げるが宜かる
と安兵衛を取巻て四人の者が町奉行所へ連れて往て仕舞ひま
した掛りの者が猶町奉行御白洲で調べると下役の調べと符合
いたして少しも偽る所が無い爰で中津川勇範等の死骸は門弟
から引取りを願ひ出たから下し置かれ菅野六郎左衛門の死骸
は松平左京太夫が御願ひに成つて引取たと云ふのは六郎左衛
門の若黨佐次郎と云ふ者が八丁堀の安兵衛の處へ手紙を持て
参り安兵衛が不在だから隣家の粉賣婆アに手紙を托して急い
で青山の己れの家へ引返して来て歸つて来たから此引斗に手紙

義士銘々傳

が有るから御目付の朝倉権内殿へ進げて呉れと云ひ付つて居
るから其通り机の抽斗の書面を朝倉佐次郎の處へ持て行く佐
次郎何事かと思へると村上兄弟に果状を送けられ是非に及ばず
高田の馬場へ出向いて不運にして命終りましたら不忠の罪は
御詫を願ふと云ふ書状懸いて殿様に申上げると

左京高田の馬場へ行て見て参れ
どの事に権内馬に乗て馬場へ来た時は六郎左衛門は討たれ安
兵衛が勇範等を殺し町奉行へ曳かれると云ふ處其處で朝倉権
内の

権此者は中々大した腕だ此人を連れて當家の菅野の跡へ
召抱へ其役を繼がせやう
と云ふ考へが起つたから菅野六郎左衛門の死骸引取りを願出
でたから速かに松平左京太夫殿へ六郎左衛門の死骸は下し置

かれました

第七十三席

此方は奉行所より御老中へ申上げると云ふて未だ其頃は仇討
 禁制の令が出なかつた時分で……安兵衛は高運な人で二度仇
 討をした迄は仇討禁制の令が出ない前切替と成つて三度目
 が御主の仇討此時はモ一仇討禁制が出た跡で情け無くも切腹
 を御仰付れるやうな譯愛で御重役から町奉行へ沙汰が奉行所
 にあつて奉行所より家主九兵衛及び安兵衛を腰掛けからお呼
 出だしに成つて御係りが
 役人浪人安兵衛其場を去らす仇討に及び且は大勢を打留め
 たるは天晴れの伎倆公議に於ても外國へ聞え日本の武士の
 意地を見する事が出来る御賞美に相成り御褒美として白
 銀一枚是れを下し賜はる……アイヤ家主九兵衛安兵衛を其

義士銘々傳

方へ引渡し遣はす随分勞り遣はし升るやうに……立ちませ
 へ……

と愛で白銀を戴いて家主と共に引退る奉行所を出て途中兩替
 屋で白銀を取替ると云ふ此白銀と云ふものは滅多に普通の人の
 の手に這入つて来る者で無いから中々取替ては呉れませんが
 安兵衛は御褒美に貰つたと云ふ證據を持って居るから兩替をし
 て呉れる

安、九兵衛さん何所で一杯遣らかさう

九兵衛が

九、何事も中山さん私は先刻から止めやうと思つて居たか上
 から御褒美を戴く人へ者は万人の内蔵く人は一人ある
 か無し何んな事を爲ても其白銀は御實に成つて居なくちや
 ア濟むめへ芽出度へ御褒美だから

義士銘々傳

安兵衛が

安「夫りやア和郎御言詞が違ふ芽出度へ事は少しも無い叔父が村上兄弟の手に掛つて死んだから仇を討つたんだ乃公も日本人中津川勇範に怨みは無い兄弟同様の同國人た目上の叔父を殺したから詮方が無い殺さなくつちやア成らねへ斯う云ふ御褒美を身に付けりやア煩ふ早く飲んで仕舞ふ方が好い

と一「杯飲んで話しく我家に歸つて

と安「寝て仕舞はう……

と横「に成つたが……お向ふの清坊や家主の九兵衛を呼んで来てお呉れ

家主の

九「何んだい中山さん何んぞ用かい
九「何んだか心持が悪くつて詮方が無い刺身を二人前に酒を一升斗り取って来てお呉れ少しは錢も有るが和郎の方から一ツ出して……

九「其奴は困る

安「困るなら奈是今日町奉行の御前白州で敵を討つた天晴の者安兵衛は九兵衛へ引渡す其方随分勞り遣はせと云つたら畏まりましたと受けたぢやア無へか酒が飲みたく成つたら酒を一升勞つて呉れ酒エ買はなければ和郎を叩き殺して町奉行の申付を背くから手打にして御届け申すと云やアまた白銀二枚御褒美を……
九兵衛も詮方が無いから酒を買つて飲ませる内に家主の門口に

侍願む……

女房が

女「イヤ御立派な御武家様……誰方様で

侍館林の家来であるが家主九兵衛お宅は此方かな

女「ハイ拙者でござい升

侍一寸御目に掛りたい

女「ハイ……那の馬鹿嘘しの御家来が……

九「ナニと……

女「何んだか御侍さんが一寸御目に掛りたいつて

九「何んだらう

と出て来て

九「エ、拙者が家主九兵衛でござい升何御用……

侍「イヤ拙者は上州館林の藩御身差配内に中山安兵衛殿留居

義士銘々傳

義士銘々傳

いたして居られるであらう何卒相當の食祿で召抱へたい當

人へ其由を被仰つて貰ひたい

九「誠に御堅くつて御出でなさるから私が申上げても如何

……浪宅へ御案内を致しませう穢うは御座い升が此方へ……

九兵衛は使者を連れて来て今飲んで寝やすと云ふ所へ来て斯

れくど云ふ

安「ア……此りやア大儀だが詮方が無へ

と禮義は禮義で厚く爲る

侍「扱て斯れくで御住込み爲被ては何ぞだ

安兵衛

安「誠に難有うは存じ升が拙者は少々願ひあつて仕官は望み

と云はれて使者も詮方無く手を空しく爲て屋敷へ歸る

義士銘々傳

侍頼む………
女貴郎亦御侍が
九此方へ御上げ申せ
逢うと

侍拙者は三州西尾の使者である和郎差配の内に中山安兵衛殿と云ふ者が居らう御案内を御頼み申す

九今何んだかか一人入らしつて御断り申した御様子で御座い升する先づ此方へ

と案内を爲て安兵衛の家の上總戸をガラリと明けて
九中山さん又御武家さんが

安ア、五月蠅へ寝やうと爲るとは来て寝るあとが出来ない何御用で
侍實は斯れく仕官を爲つしやらんか

義士銘々傳

安仰せ有難いが安兵衛は主取りは望んから御主君へ宜しう仰せ下さい
と断わる斯く安兵衛を抱へやうと云つてお大名からは来ない大名は負け惜みがあるし且つは代々好い劍客者もあるが随分御譜代大名或は小身大名から安兵衛を競そつて抱へたいと云ふ

安九兵衛
九へエ………

安何うも然んなには呉れめへる千石呉れても乃公はおつくらな窮屈を主取りは爲ねへ積りだから乃公ん處迄連れて来ずには和郎の適宜で主取りは望みませんから決して御逢被爲ても無駄でござると追返して呉んなせへ
九安兵衛さん勿躰無へちやアございませんか百石百五十石

傳々銘士義

と云つたら一年に餘程大した上り高に成るだらう斯う遣つてススく爲て居るより百五十石の殿様に成つた方が安否やさ百五十石は大したものだ云つた處が夫で身を賣つて仕舞はなければ成らん清貧を樂しむと云ふんで富めるに非ず貧あるに非ずと云ふ譯にやア不可ねへから一瓢の飲一罇の食脰を枕と爲る顔回を氣取り相變らず家主九兵衛をせびつて酒を飲み氣樂に世の中を送りてへ九然んなに絞られちヤア此九兵衛が身代限りを出さるにやア成らねへ……

九十

と家主よこぼしたのも道理至極家へ歸ると

女阿父さん又御武家が

九是れば入らつしやい定めて安兵衛御召抱への儀でございませうが仔細あつて安兵衛には主取りは望みませせん御主君

傳々銘士義

へ宜しきに誠に御氣の毒様へエ左様なら
待頼む……
女亦御出で
九エ、中山安兵衛には主取りは望みませせん何卒御前へ宜しう御苦勞様
男御免なさい
九又來た中山安兵衛主取りは望みませせん御主君様へ
男大家さん徳利を……
九チ、酒屋の子増だつたか
と云ふ有様、爰に淺野内匠頭は御留守居役で堀部彌兵衛と云ふ人がある誠に頑固だが夫婦の中にお照と云ふ娘がある彌兵衛は老人に成て設けた子、先妻に子が無くつて病死を爲て後妻を迎へて産んだのがお照と云ふ十八に成る女ッ振も好いから方

九十一

義士銘々傳

々から養子を云ひ込んで来る

甲「私の御世話をしたまけるのは持參金も多分に持て參り升

男ッ振も宜うござい升

彌「何歳になる

甲「恰好御年廻りも宜しく二十二三に成り升

彌「武藝は何うだ

甲「可成……

彌「可成ぢやア不可ない免許があるか

甲「目録がござい升

彌「目録ぢや不可ないモ一二十三に成れば免許の腕が無けれ

ば成らん乃公は持參金を望まない乃公には辛く當つても御

主君に忠義一圖に奉公を爲て呉れば好い乃公程に遣る者

があれは仔細無ん

義士銘々傳

と聞いて其養子も是りやア乃公では無益だと断念る乃公程の腕前と云ふが彌兵衛程に出来る人は天下泰平に然う澤山は無

い彌「お照此處へ來い

照「ハイ……

彌「ア、一手段は不孝者だ男に生れて居るなれば今頃は其方

に家督を譲る何故女に生れた不孝な奴である

と無理を云つては戯れ升女房も實に良人の愚痴を聞のが嫌だ

から其時分には唯今の堀の内祖師の様に維子ヶ谷の鬼子母

神を大層信心を爲る者が多かつた亦利益もあつたと云ふ事今

は其株を堀の内祖師に取られて仕舞つた其處で彌兵衛の女

房が鬼子母神へ月詣りの願を掛けお照を連れて何卒好い養子

の見當るやうにと鬼子母神へ月參を爲る今日も今日とて

義士銘々傳

女房「今日は鬼子母神へ參詣を爲して參り升から
彌「然らば早く行つて來るが好い誰か連れて行くか
女「吉藏を連れて參り升
彌「宜からう」
彌兵衛は一石者であるから今日は廻り道を爲して參り升から
と云つて廻り道を爲すに早く歸ると其人を僞つたと怒る
て廻り道を爲して刻限を移すと亦腹を立つと云ふ實に機嫌の取
憎い人其處で御新造が鬼子母神詣でが濟んで高田の馬場迄掛
つて來ると大勢人が立ち居る來て見ると今此處で武藝者の果
會が始まる云ふ母親が
母「何んと果會ひと云ふ事は滅多に見られないものだから見
て行かうぢやア無いか妾も和女も武士の種眞劍手詰の勝負を
見て置くくのも心得の爲に成らうまた是が鬼子母神の御利益

義士銘々傳

お照は娘氣で餘り見度くは無いが母が然らう云ふ者だから否と
も云はれん處へ大勢慕張りの内へ這入つて來る程も無く老人
も來て切合が始まる老人が殺される皆膽落して崩れて歸ろう
と云ふ處へ浪人隊の者が高田の馬場へ馳付けて來て老人の死
骸へ取付きヨ、と泣き敵討と云ふ時に下緒が切れた
女「方一此人は浪人だから此處で腕が美事だつたら聲に成る
人かもし知れん浪人なら大概話しは纏るだらう
と妻君鳥渡才物だから其時の掛橋にと過日買つて遣つた斗り
の娘の腰帶を解て安兵衛に貸て遣つたんだ夫れだから歸りが
遅い彌兵衛は拵持故にチリ／＼爲て居る

義士銘々傳

彌半平や
彌「鬼子母神詣では何うしたらう
半「大層手間が取れ升ねへ
彌「今頃迄には往復が二度位出来る
半「へエ
彌「其邊迄往つて見て来いモ一歸つて来るだらう
半「往つて見て参りましたか未だ見えません
彌「思々く敷い奴だ其長物を此處へ持て来い
半「何うなさるんで……
彌「イヤ妻も娘も不埒な奴だから手討にいたす切つて捨てる
半「へエ……
懣いて居る處へ御新造とお照殿はせい〜と歸つて来て

義士銘々傳

女半平や今歸つた日
半「此りやア御歸んなさいまし
女「思は定手間を取たんで定めし旦那が御立腹
半「イエモ一大變な御怒りでござい升親子共手討に爲ると云
つて大層な御威勢
女「ナニ氣心を知つてゐ夫婦の中心配を爲るには及ばない怒
りなさるのも早いがまた解るのも早いから決して心配無く
……雑巾を貸てれ呉れ
と足を拭て平氣で御新造は
新「貴郎唯今
彌「ヤイ〜此方へ来い
新「餘り砂だらけに成りましたから衣類を着替へまして
彌「首と胴と別に爲るのに着物は要らん鬼子母神詣でが何故

斯手間取れた返答……
 新マア貴郎の様にガミく被仰ると此方で返答が出来ませ
 ん……ノ一れ照定めし阿父様が怒つて御出でだらうと言
 して居りました
 彌怒つて居るだらうと心注き乍ら何故斯く手間取れた
 女「イエハ夫さから御話しを爲なければ分りません
 彌サ早く話せ
 女「アノ鬼子母神の參詣が濟みまして高田の馬場迄參ますと
 武藝の遺恨で武藝者同士の果合があると云ふ事を聞きまし
 た武士の女房に成るお照に嫌でも有らうが武士が生死決斷
 を見せて置いたら宜からうと存じて殊には鬼子母神の御利
 益で相當の銀が此勝負の内にも有るかも知れんと斯う心注
 ましたから嫌がる娘を勸て其果合を見て居りましたので大

きに刻限が遅れましたのでござい外
 彌ア、然うかイヤ然う事が分れば何も立腹する處は無
 負があつたか
 女「有つたの何んのでございせん
 彌何う云ふ切合であつた
 女「相手が八人で
 彌此方も大勢か
 女「僅た一人で……
 彌僅一人……
 女「貴郎より少し年の若い人でござい外
 彌乃公より少し若いとしてからの老人だ
 女「皆な見て居り外者が相手は若盛り八人此方は老人一人始
 つたら理由無く一人の方が打れて仕舞ふだらうと言

義士銘々傳

て居る者が申して居りましたスルと雖も、
て老人の方には間庭念流……と申す指南を爲る者で敵の何
とか名前を名乗りましたが老人の事故聲が微かでも聞取れま
せん
彌ウム流石は乃公の妻間庭念流を忘れずに來たのは感心だ
夫れは上州間庭の樋口の家元だ悪く云ふ者はあるが新らし
くして大家を爲したからまた便利の太刀もある
女相手は一刀流の中津川勇……範とか云ふのが助太刀で
彌一刀流の家元みたいなんだ夫れから何うした
女其八人を相手に立會が始まり舛て其老人の豪さく大勢
の方が切立てられたのみならず若いのが一人老人に討たれ
ました
彌ア、一感心……何うだ女房今は若へ奴等の修業が未熟だ

義士銘々傳

から腕が足らん乃公位の年輩の者は密であるから腕前も美
事だウソ然ぢか夫れから何う爲た
女すると貴郎後から見上げる様な大坊主が鎗を以て拔足差
足忍び寄つて突きました
彌夫れは卑怯未練其鎗を交す間が無かつたらう
女後に目がございませんから腰の邊りを突かれ升ると能く
働いて御座つた御方がアツト一聲後に御倒れ爲ると前から
切込んで來た大勢の劍の雨、女の私には誰の刀が何所を切つ
たか分りません遂々御最期……見物が那の老人に子は無
いか兄弟は無いか是切りで終つたら老人も浮ばれまいと云
ふ噂取りく
彌コレ照夫れぢやから貴様が奈是男に生れんと常々云ふは
此事だ今日は人の身明日は我身明日にも何んの遺恨で乃公

義士銘々傳

が討たれまいものでも無い其方が男あれば及ばず乍ら其所
へ馳付けて敵と討て呉れるだろうが甲斐無女何うして乃
公が無念を晴す不孝者奴……夫で何か夫切りか
女「イエ詮方が無いから歸ろうと云ふ處へ貴様浪人体の若者
が願けて参りまして老人の死骸に取付き天地の間に一人
の叔父と歎きましたがいざ一同を切て捨てんと云ふ意氣組
で刀の下緒を纏にいたさうと仕ますと三つに切れまして襟
に足りません落散つた荒繩を取つて襷に掛けやうといたし
升から浪人で未だ獨身だし男振も立派であるし腕の好い者
だつたら幸ひ娘の養子に致たし夫れには恩を着せて置かな
ければ成るまいからと思ひましたから貴郎にお叱りを受け
るか知れませんか過日てるに買つて遣はした腰帶を右の若
者に心置きなく用ひるやうにと襟に遣はしましてござい升

義士銘々傳

彌兵衛が
彌見上げた心底、嗚其勝負は美事であつたらう
と思はせ前に乗出す敵討の物語り、彌兵衛安兵衛を命に替て戀
望に及ふと云ふ義理に擲まり中山安兵衛雄常が堀部へ養子に
入るの一條

第七十四席

彌兵衛は女房を褒めて

彌夫から何う爲た
女其浪人が立上つて大音に幕の内に物申さう某の一人の御
中山……何どか名乗りました一同來つて勝負を爲ると立上
つた有様は勇氣凛々として邊りを拂ひ實に英雄豪傑と云ふ
は斯んなものかと思はれました

彌ウムー……
女然るに幕張りの内から各々身仕度に及んで走り出で戦ひ
に成りましたたがイヤ何うも其浪人の働きの速かなること私
共の目には留らん位でございまして皆相手の者を美事に切
倒しましたたが妾も驚きました
彌ウムー……聞てさい勇ましいこと左様な者を我養子に爲
たなれば上にも忠義を盡して呉れるであらう乃公は何んな
に邪慳に爲れても厭ひは致さん其處で皆殺しに爲たか
女ハイ一番仕舞に老人を欺し討に爲た中津川何……靴とか
云ふ坊さんが出まして是は少し戦ひに手数がありませんしてス
ルと其浪人が死骸に取躰いて後へ倒れましたハツと思ふ内
に飛上つて坊さんの右の腕を切つて棄て再び左りの手を切
つて棄てました遂々坊さんの人も討たれましたございけん

彌イヤ夫は……イヤモ一討たれた老人も定めし残念を補
つたであらう其處で其人の姓名且は何處に居さつしやるか
委細は聞たであらうなア……
女「イエ夫を承はらうと思ひ升る處へ御町方の御出役でござ
いまして其御人を取巻て何か問糺して居られましたたが遂々
大勢に取圍まれて御町方へ連れられて参りまして残念なが
ら姓名も住居も聞かずに唯今歸つて参りました
彌「夫りやア何うも和女も佛作つて魂魄入れると云ふ此者を
養子に爲たいと目星を付けて腰帶まで貸して遣つて姓名と
住居を聞かんと云ふのは和女に似合ないこと然し江戸市中
に居る者なれば尋ねたら知れん事はあるまいイヤ何うも其
者を養子に爲れば此上の望みは無……
と云つて彌兵衛が何と無く心面白からず鬱々として居ると二

義士銘々傳

日許り経過と
八百屋「今日ア

と来たのは八町堀から来る御出入りの八百屋

八「半平さん八百屋でござい升が何か御用はございませんか

半「チャ八百屋さん二三日働けたちやア無いか

八「怠けたと云ふ譯ぢやアありません私共の近所に恐ろしい

勇しい事があつて麻上下の侍が大勢来るんで遂人の喜悅び

ことに浮れて酒を飲んで騒いで仕舞ひました

半「何だい

八「イヤ私共の隣り裏に中山安兵衛さんといふ飲だ呉れがあ

つて何うも身性が悪くつて始末に不可ねへんでございまま

たが過日高田の馬場で叔父さんが武藝の遺恨で殺されて其

處へ馳付けて和郎さん向ふを七人切つたんで其處で方々か

義士銘々傳

と半平奥へ参つて

半「旦那高田の馬場で敵を討つた御浪人の在所が分りました

彌「分つたか
半「今御出入の八百屋が是れノで……

彌「然うか……

義士銘々傳

と云つて彌兵衛臺所へ飛出して聞くと八町堀松屋町に裏住居を爲て居て斯ふくだと云ふ彌兵衛が聞て

彌ホツ……

と一息吐きましたたがまた考へた

彌待てヨ然程迄に大祿を以て抱へたいと云つて來る者に主取りは望まんど斷る見識の處へ小身の乃公が養子にと云ふ此りやア少と話しが纏まらんかも知れん然し是も上へ御奉公のつだから乃公の自身に出向て掛合込み理を非に曲げても養子に成つて貰はう次第に由れば刀に掛けても是非共に……

と云ふ是を聞て居た御新造が

女マア貴郎然う御急き被爲ても不可ません良人は御老人でも氣が張つて居らつしやい升から万一懸合の崩れから命

義士銘々傳

にでも及んでは成りませんから妾は御名代を勤めませう

彌和女が往つて旨く纏るものか……

女イエ妾が參れば女で理窟が分らんと云ふのを土臺に出して無理に妾が居催促を爲て今迄試しの無い養子の居催促……

次第に由ると二日や三日は掛るかも知れません先方が持餘して承引をいたす迄は妾が結込んで居ります

彌成程夫が好い……万一此養子が纏らん時は氣の毒だが貴

様離縁を……

女イエモ一夫りやア宜しうござい升妾も覺悟の前でござい

舛から……

と彌兵衛の妻君は娘に何か叫いて是から仕度を爲て供を一人連れて八町堀松屋町家主九兵衛の處へ遣つて參りました女の聲で訪問れる者があるから九兵衛が出て來て

義士銘々傳

九「此りやア入つしやい誰方でござい升
 女「エ、此方の御差配内に御浪人中山安兵衛様と云ふお方が
 入つしやいませう其方に鳥渡御目に掛りたく御尋ね申しま
 したるが御案内を御願ひ申す
 九兵衛も侍なら抱へに來たんだから願まれたやうに斷るが女
 だから
 九「豈夫抱へに來たんではあるまい此りやア別に何か用事が
 あつて來たのだらう
 と思ふから
 九「左様なら御案内をいたし升其溝板が破損んで居り升から
 此方へ御寄んなすつて……是が中山さんの御浪宅でござい
 升
 安兵衛は今鮎の差身で一抔飲んで居る處へ

義士銘々傳

九「安兵衛さんく……
 安「何んぞい……
 九「何んぞか御婦人が御出でございまして御目に掛度いと
 云ふ御逢被爲たら宜うございませう
 安「ナニ婦人が……ハテナ……心當りは無いが……
 九「云ふ内にガラリと九兵衛が表の戸を明けた處から安兵衛が
 ヒョイと見ると高田の馬場で襦袢に爲へど云つて緋鹿子の腰帶
 を貸して呉れた婦人
 安「ハッ……
 九「思ふと安兵衛忽ち溝板の上に飛出して
 安「是れく過日の御深切は未だに忘却はいたさん能うまそ
 御尋ね下さつた
 九「三拜九拜爲て居る安兵衛は中々禮義を厚くする人物では無

義士銘々傳

いのだが堀部の女房を見ると云ふとイヤ何事も低頭平身爲て
居り升此りヤア何かと云ふと過日借りた腰帶がわれば好いダ
モ一屑屋に賣つて仕舞つた落度があるから斯の如く……彌兵
衛の女房が

女「扱て其節は御本懐誠に恐悦……」
安「ヤ何うも難有う存じ升が扱て拜借の腰帶には少々血の刻
ねましてござるから長家の老婆を頼んで洗はせ那の掛竿に
干して置きましたる處度々此裏へ参る屑屋が見て此りやア
性が宜いから賣れ〜と申しイヤ拜借の品だからと申すの
を無理鎗に買つて往つて仕舞ました全膝那の屑屋が悪いので
何うせまた参り升から明日にも賣先を詮して御宅様を承は
り必走返上に伺ひ升から何卒御猶豫を……」
女「〜エ〜」腰帶の事は如何でもようございませすが其時貴郎

義士銘々傳

此恩は生々世々忘却はいたさんと云ふ御一言がございま
したか御武家様の御一言は出ては返らんもので定めし御記
臆で入つしやいませう忘れはいたし升まい
安「イヤ然う御理詰に成つては甚だ當惑で何れ屑屋を……」
女「イヤ腰帶の事を此方で申すのでございません

安「何んで御坐い升……」
女「實は妾は淺野内匠頭留守居役堀部彌兵衛秋實の妻でござ
い升娘が一一人あつてお照と稱け彌兵衛が何うも心に叶ふ養
子も無く是を朝夕心配をいたして居り升るに就て娘を連れ
て月々鬼子母神へ詣で升るのは好い養子を切望見當たるや
うにと云ふ願ひ過日高田の馬場で貴郎の御働さを見ました
のも恰好鬼子母神参詣の歸りですと涙を流して御腕前を感じ
柄を立歸り彌兵衛に物語りますと涙を流して御腕前を感じ

其御人を養子に爲れば望み足りると申して居り升斯の如く御幕ひ申し段々御評判を承はれば大家の士官をば御断り遊ばして在つしやると云ふ御見識何分小身大名の留守居役の養子にとは此方から申出憎うござい升が良人彌兵衛の望みを貫きたい妾も精神今日出ましたは右の御願ひに出ましたので彌兵衛の養子にとは誠に申し憎い次第でござい升が良人の望みの足りるやうに御承知下されば難有う存せると座り込んだ安兵衛が

安「何うも其儀に就きましたしては仔細あつて無祿で生涯終る積り……仕官は望みません誠に御芳志は有難う存じ升が宜しう御断り

女「イエ貴方が鐙入り御承知の無い内は私家へは歸れません貴郎が承諾無き時は私は彌兵衛に離縁を致され升者でござ

い升何卒切無き心を御汲に成つて曲げて御承知を……

安「夫は甚だ迷惑と云ふもの

女「御迷惑でもございませうが切望……

安「夫は失禮ながら無法……

女「無法は承知でござい升女は理屈の分りませんものでございまして切卒平に御承知を……愈々御承引無くんば私は良人の許へ歸られません身躰に成つて居り升からは是にて自害をいたして相果てる覺悟は最早極つて居り升る

と云ふと帯の間の用意の懐劔を取出してギョリと引抜てアワヤ突んど爲る安兵衛驚いて

安「アイヤ先々御短氣あつては成らん荷くも上から御褒美を頂戴いたしました安兵衛十日経過んに婦人の自害があつたと云つては私姓名に係ける御短氣あつては迷惑いたす

女「去らば望みを御容れ下さるか
安「夫は餘り強談……
女「イヤエモ御無理は承知命を投出して参つた私でゝる
口無調法の安兵衛は誠に持扱つちまつた

安「此婦人の命を棄てさしては氣の毒だから詮方が無い假に
承知して歸した跡で浪宅を變るより外は無
と考へましたから

安「イヤ然程に思召し下さるなれば據無い是非が無い如何に
も堀部氏の御養子と相成り殿様に忠勤を立てるで御座らう

女「ア、一有難い御意でござい升定めし彌兵衛も悦びの眉を
開き升るでございませう就きましては良人の申し升には御

承知の上は入聲と云ふ者は見識が下るもので良人に權の無
いのハ不都合なものであるから御承引下された上は此家へ

娘の照を嫁に差上げ日柄を撰んで堀部に御招き申して宜し
からうと申す良人の命令でございまして恰好今日は吉日で
ござい升から善は急げと申す譬への通り今日此方に娘の照
を嫁入を爲せる事に仕ります……アイヤ駕籠を此方へ……
と門口へ出て路次の方へ向て一聲掛けるトとたんに息杖の音
が爲て輕籠の駕籠が浪宅の門口に下りる引戸を明けると云ふ
と儀式の身拵で娘のお照面氣に這入り來り貧乏徳利竹の皮の
散して有る上を危お氣に跨ぎ安兵衛の傍にヒタリと座つて禮
儀をいたす

女「扱て娘は不束ながら今日から御側へ芽出度共白髪まで……

……私には御開きにいたさう早く立歸り御承知の由を彌兵衛
に物語り安心をいたさせ升不束の娘は確に御側へ差上げま
した

義士銘々傳

と人質に娘を側へ附着て歸る安兵衛は膽を潰して逃げるも退
くも出來んお照が傍らに居て萬事の世話を爲ると云ふ其處で
安兵衛が斯迄に思ひ込んで呉れたなれば人の姓名と繼ぐと云
ふのは身の本意では無いが據無いから是は堀部で身分を極め
なければ成るまいと云ふ考へが付た三日経過と云ふと今日は
日が好いと云ふので半平が先立に成つて安兵衛の處へ
半堀部彌兵衛家來半平吉日故今日は御迎ひに出ました失禮
ながら御乗物も持参いたしましたして御夫婦前二挺……是は御
仕度でござるから
と云つて取出したのが流石女だ堀部の女房が安兵衛の着丈を見
積つて着物羽織胴着襦袢下着大小提物須らく鼻紙鼻紙袋手拭
に至る迄持して遣しました
安兵衛が

義士銘々傳

安「斯迄に心を入れて我を慕はれて見れば愈々是非に及ばん
から内匠頭は忠節を盡し扱ては堀部夫婦に孝養を盡さんけ
れば成らん
と決心して遠慮無く着類を着替へると半平
半「エ、長持を持参いたしましたした御大切なる御品御手廻りの
を品等は是へ何卒御出し下さい
是には安兵衛殆んど赤面して御手廻りの御道具と云つて今戸
焼の火鉢を出す譯にも成らぬ罫丸火鉢を出す譯にも成らん
……と云つて無いと云ふのも残念だから
安「是は先祖重代の寶でござるから是を何平御持参下さい
と關孫六三本杉の刀を出した大きな長持へ刀一本だから歩く
度びに中でゴロリと歩いて刀が轉つて居ると云ふ遂に安
兵衛は堀部へ養子に及んで是が二度目の敵打であつたと申し

升是を御預け中松平隠岐守殿の御夜伽話しに夜々續きに申上
げたのを盡く御賞美あつて是れを御書留に成つて安兵衛の傳
記は隠岐守様から後に出來たるもので遂に講釋屋の材料と相成
りました此安兵衛のを物語りば是丈けで讀留める事にいたし
て此方は赤穂の浪人であり升

第七十五席

扱て此方は公邊の御役人が

甲「赤穂浪人の身の上は何う爲たもんだらう

乙「法破りは法破りだが何うも此廉で死罪を申付けると云ふ

何うも忠義の侍をムザク死刑を行ふと云ふのも情け無いこ

と云つて此儘逃しては折角出した仇討禁制の令か取消し

に成る然うしたらは是からさきに又敵打があるであらう困

此時ツたものだ

此時に柳澤出羽守が

出羽「然らば大石内藏之助の今迄に行なつた處に非を打つ處

が何かあらう屹度十に一ッは落度がある夫を名々拾上げた

ならば九ヶ條や十ヶ條に成るうから其所で簡條目安を拵へ

て内藏之助一人を呼出だして御尋問あつて申開きの立ん少

條を主目にしたして死刑を申付けた事あれば國主大名外様

衆が徳川の政治に非を打ち爲まい御いでござる

甲「成程是れは出羽様の仰せの通り夫が至極宜まからう、夫れ

奇れば大石内藏之助の欠點を發見するが好い

と是れも落度、是れも彼等が手拔でござらうと段々拵ひ出すと

爰に十八ヶ條と云ふものが出來ました其所で十八ヶ條の目安

を拵へて大石を是から御呼出だしに成つて此調べで落度を擱

義士銘々傳

へて死刑に行はうと云ふ爰で元祿十六年正月八日大目付仙石伯耆守殿御役宅へ罷り出でべき旨御汰沙尤も御役人御登城前の御調べであるから明六ツ時召連れ罷り出でると云ふ御沙汰に成ると細川殿大主が
主「是は何か内藏之助の落度を御尋ねに成らう何卒明白に爲たいものだ
と云ふのは越中守様の望みでは御預けの赤穂浪人四十七人を無罪にして自分の家臣に爲たいと云ふ斯う云ふ御望みがあるのだから
殿「家來一人差添と云ふから此差添人は確乎した者を撰んで其差添人が大石の欠點を埋るやうな者を出さなければ成らん誰が宜からう……
と云ふ事に成つて有吉四郎左衛門、中安平八郎、澤村才八郎此三

義士銘々傳

人の内で澤村才八郎が宜からうと云ふのは此人は恐ろしく大膽な人、何處へ出ても怯げない人でござい升から澤村が宜からうと云ふので澤村を御撰みに成りました此人は越中守様から一万十石三人扶持と云ふ判評の是れはお人、正月八日七ツ半時供揃ひに及んで澤村才八郎内藏之助同道で西丸下の土屋侯の御玄關に掛る公用人中野主馬が
主「此所は御玄關であるから中の口から廻らつしやるやうにと云ふ
才「委細承知いたしましたが細川越中守家老でござる御用の節は御老中御玄關より通行仰せ付けられてある、内藏之助を召連れ出でました何卒細川家風通り御玄關より通行を願ひたい
土屋相摸守に申上げると
殿「然う云ふ例もあるだらう……イヤ然し面倒だから玄關か

義士銘々傳

ら通せ
 と云ふ事に成つて暫時休息所へ通り御休息願て御縁側通りへ
 御召出たしに相成り御老中は稻葉丹後守、土屋相摸守、秋本但馬
 守お係小笠原佐渡守殿には御席をズンと前に乗出して御着
 座に相成る若年寄加藤遠江守、本田肥後守、井上河内守、寺社奉行
 阿部飛騨守、本田彈正少彌、永井伊賀守、大目付仙石伯耆守、安藤筑
 後守、近藤備中守、町奉行安田越前守、松前伊豆守、御勘定奉行根方
 因幡守、外川豊前守、御目付鈴木源吾右衛門、多々良善八郎、水野吾
 左衛門、久留重左衛門、松平兵庫、向井左兵衛助、家來近藤伴右衛門、
 石田善右衛門、高家品川備前守家來野村源兵衛、品川主馬、差添で
 参考人で呼出された、澤村才八郎は黒羽二重の小袖行儀あ
 られ九曜の星の定紋付たる上下、内藏之助を先に立つて跡に従
 ひ大石は鬘斗目、ニッ巴の定紋付たる麻上下を着用に及び小笠

義士銘々傳

原佐渡守御着席から御疊三疊斗りを隔つて平身低頭をして居
 る、佐渡守殿が
 佐元淺野内匠守家來家老、大石内藏之助御不審の筋あつて御
 召出だしに相成る唯今御尋ねの目安是れにて諷聞かせる承
 はるやうに……
 松平兵庫に小笠原様が御向ひ被爲て
 佐大石の不審の箇條是れにて諷聞かせい
 兵ハ、ア……
 と是より十八ヶ條を諷聞かせました其箇條と云のは
 一此度淺野内匠頭家來大石内藏之助頭取仕り多人數徒黨い
 たし主人の残念を次き仇討と申稱へ吉良左兵衛之介宅へ
 推参に及び狼籍の働さ不屈の至りに候事
 一度御法に由り御裁許相濟み候儀を御膝元を憚らば亂暴

義士銘々傳

一 夜中に忍び入り相働さ候條盜賊に均しき致し方不屈きの
 事
 一 非常にも非ざるに江戸表に於て一同火事裝束着用致し候
 段法外の事
 一 天下の格式を定め立て置かれ候御法を辨へ左兵衛助屋
 敷表門を打破り押込み候段不屈の事
 一 夜中押入り候故火を持参いたし候儀は勿論の事、松火なる
 や提打なるや明らかに言上いたすべき事
 一 長道具を持参いたし相働さ候段法外の事
 一 鳴物を持参いたし御法度を辨へざるいたし方不屈きの事
 一 采を以て他人數馳退さいたし候條戰場に近き催し謀叛一
 味に類する事

義士銘々傳

一 吉良上野介には恨み是ある共左兵衛介に傷を負はせ候段
 親子共討取るべき心底あるや明かに申上ぐべき事
 一 内匠頭家來一味同心の者數百人四方を堅め左兵衛屋敷は
 抜身の鎧三本を以て相固め候は是等の者は何方へ立退候
 哉包まず申上ぐべき事
 一 倍臣の身分を願せ商家の主家たる左兵衛助宅に押込み思
 ひの儘舉動殊に大勢打入り候段公儀を恐れざる致し方不
 届き至極の事
 一 上野之介宅勝手の子萬事案内の由定めし手曳の者有之
 るべく明白に申上ぐべき事
 右の條々は御尋に付申譯け有之り候に就ては明白に申上ぐ
 べき事
 扱てなりを静めて一同は此答へ如何ならんと手に汗を握つて

御着座に成る大石頭を上げて第一ヶ條より順に申開きに及ぶ
と云ふ大石内藏之助か十八ヶ條申開きの件り次回に……

第七十六席

此時小笠原佐渡守

佐去年十二月十四日の夜其方頭取と罷り成り四十餘人吉良

佐兵衛介宅へ亂入に及ぶ是れ徒黨にして敵討とは稱へんが

何うぢや

内藏之助頭を揚げ

内恐れながら申上げ升私内匠頭譜代の家老にて亡君存生よ

り年寄役相務め代々使はれ候頭取の儀は勿論此度限り申

さ老然し徒黨には無之候

佐イヤ四十餘人は徒黨であらうが

義士銘々傳

内イヤ皆内匠頭家來のみにて外人數一人も加へません故徒
黨では御座無く私義は五万三千石の家老君は天下の大權

の理非曲直を辨じ玉ふの御身御賢察の程を願奉りまする

土屋相摸守殿は

相切望して内藏之助に此難問を申開かせ願くば死罪一等を

許して遣りたい

と云ふは御見込があらつしやるから稻葉美濃守に御向ひさ

れ

相美濃殿唯今内藏之助申開きは明白のやうに存する内匠頭

家臣主君の殘念を補ふと云へば義黨と稱へて然るべく徒黨

とは徒らの輩と成る餘り情け無さ申分で御座らう

と傍で周旋つしやる佐渡守が邪魔に成るから

佐イヤ各々左様御賞美は近頃其意を得走彼に逃がれぬ事あ

義士銘々傳

り……内藏之助御膝元を憚からず狼藉に及び候段申譯けが
 あるか何うぢや
 内「恐れながら御膝元とは其意を得奉らば上野介殿宅は御用
 心殿密にして中々に打入り難く御登城御歸りを待つて道路
 に待奉れば心の儘に候得共夫にては御膝立を騒がし候儀も
 之有らんかど存ぞ左兵衛介御自宅へ推参仕つて御坐る爰に
 隅田川と云ふ流れあつて兩國橋と稱へ候田舎待の心得には
 下總武藏界の橋なればこゝ兩國の名あるべし本所松坂町は
 下總にして武藏隣國の事なれば御膝元を騒がすの御咎めは
 あるまいかど心得る由て御宅へ亂入に及び候
 稻葉様が
 美「是も土屋好いやうで御坐る本所は下總の地にして御膝元
 におらばア、一内藏之助好い覺悟で御坐る

義士銘々傳

昔は本所は下總の由去れば兩國橋と申しました
 相摸守殿
 相「然らば尋ねる尋常に参るべきに夜中に及んで亂入致すと
 は是盜賊の所爲に等し此義は大石如何なる心底なるぞ……
 内「恐れながら仇は商家の御歴々且は上杉家の御味方あり中
 々尋常に参つて浪人の能討奉る事能はざるは勿論万打漏
 し候ては亡君の憤りを増すと心得大敵には夜打先掛けと承
 はり居り候に付右夜討をいたまされた去れば盜賊に紛らは
 しからざるやう討入り引揚げとも御隣家へ御届け置きまし
 た然るを盜賊とは痛み入つたる義に御坐い升
 相「ッ……其方始め一同火事裝束着用非常第一嚴重の御府
 内に於て穩便ならぬ致し方豈夫申譯はあるまら
 内「五十人に近き人数一緒に打拵候事穩かならずと雖も田舎

義士銘々傳

侍は火事裝束は火を消すの道具と存じ候御府内警衛の爲旁々以て火事仕度をいたしまして御座い

百三十二

土屋様が

相イヤ是も申開きが立つたやうで御座る火事裝束を着て火

を付けて歩くものも御座るまい非常殿重の御府内で火事裝

束は何も答める處は御坐るまい

佐然らば別の箇條を尋ねる夜討の砌り太刀添にて相濟むべ

きに長道具を持參いたし候は軍事に均しき致し方此儀は如

何に……

内一同に其品を所持いたさせましたるは相手は高家の御歴

々殊に上杉家の御加勢も有之り大勢を相手に仕り候覺悟に

付持たせましたは九尺柄の手鎧に御坐い升殊に師父の教へ

を受けました處九尺柄を鎧と稱へ二間柄を長柄と稱へ候由

義士銘々傳

右は亡君内匠殿存生より諸士三百七人に此手鎧は相許し
置き候故右手鎧を相もちひさせました古來より武者道具四
百八十餘品の内長道具と申すべき品は未だ一向承はり申さ
ず右様の品は決して持參仕りません心得の爲長道具と申すは
如何なる品に候や伺ひ置きたう御坐る

と云はれて小笠原様が

佐ハッ……

と息詰りましたが長道具と云ふものは決して無い是は御祈筆の

間違ひで長柄を長道具と誤つたのであり升小笠原様が再び言

詞を繼いで

佐夜討の切敷百人上野の屋敷を固め窓一軒に拔身の鎧三本

を以て拒ぎ候由是なる人数は何方より出で、何れに引揚げ

たるや明かに申すべき事

百三十三

義士銘々傳

是は内藏之助にも知れなかつたと云ふ浪人が吉良へ討入ると
黒打袴の侍數百人出て来て吉良の屋敷を取巻たに違ひ無い凱
歌が上ると何れかへ消て仕舞つた藝州から出して呉れた人數
か大石の兄玄蕃が出て呉れた岡山池田の人數であつたか一
説には大野九郎兵衛と大石と二組に成つて事を謀らうと爲た
大石組が五十人、大野組が五十人、片々の長は内藏之助、片々の長
は大野九郎兵衛、前後の鬨を曳くと前を曳たのが大石、後を曳た
のが九郎兵衛、其處で九郎兵衛の五十人は不忠の名を背負つて
態と逐電に及び大石が之を討つて万一破れて仕損じた時には
此五十人が起つて上野介を狙うと云ふ然し大石の方が功を奏
して仕舞つた然らば吉良の外口を固めて居たのは大野組の人
數では無かつたかと云ふ万一是が眞説でありましたら大野の
忠義が全で隠れて仕舞つて氣の毒なもので御座い升が多分は

義士銘々傳

臆説と思はれ升内藏之助
内「恐れながら唯今の御尋ね其意を得せ私共四十餘人の外に
助勢加勢と云ふ者は一人も御座いません吉良の屋敷を固め
た杯どは跡方も無き虚言で御座い升
向ふに控へて居た吉良の家來近藤半右門、木田仙右衛門
仙「恐れながら申上げ升私共此珍事を上杉家へ御注進申上げ
やうと存じて門からは逆も出られまいと存じて長家の窓を
毀して此處より表へ逃れやうと爲ると窓の表から拔身の鎗を
を私目先へ突出し出でる時は據無し命を取らんければ成ら
んと脅されまして遂に出盛みどいたして見共無い身の上
と相成りました全く戸外より拔身の鎗を差出たしたに相違
御座いません
佐「内藏之助参考人は部の通り申すが何うじや

義士銘々傳

内「イエ一切外人數を頼みました覺るは御座いませんが唯今
考へて見升れば十四日の夜は二三日降り續きましたる雪で
白晝は好天氣で御座りましたる故雪解に相成つて雨垂れを
落ま是が夜に入り寒氣甚だしく相成り其爲に雨水が氷つて
軒端より氷柱の下りましたのを進退の掛引をいたし乍ら私
も見まして御座り升吉良の家臣が主人の大切を見棄て、上
杉に注進は表向きで他へ逃れやうといたす臆病者、卑怯者の
目には自然此氷柱か拔身の槍と見ましましたかと存じます古
へ平家の士水鳥の音と敵の叫の聲と間違へ破れましたる前
例もあり升宜しく御賢察を願上げ升
佐何うちや半右衛門仙右衛門

兩人か

半「憚りなから申上げ升如何に私共卑怯にいたしたにもせよ

義士銘々傳

氷柱と槍は見違へません槍は下から突上げ升もの氷柱は上
から下つて居ります者で御坐います
差添人の品川主馬と云ふ人は矢張り吉良を憎んで居る者で切
望大石に言開を爲して遣りたいと思ひ升から
主「イヤ半右衛門仙右衛門和郎達が喫驚爲た目から見たから
鎗に見たのだらう氷柱だ
と遂々氷柱と云ふ事に成つて仕舞ひました多くの御役人は思
はせッス〜と笑ひが漏れたと云ふ位あもので氷柱と極つ
て仕舞ひましたが小笠原様は大石に向ひ
佐「然らば次に尋ねるが吉良佐兵衛之介表門を打破り亂入に
及び候事狼藉至極言語同断長役を相勤める其方表門の大切
を知らざる事もあるまい如何ぢや
内「表門を大切と相心得裏堀へ階子を掛けて闖入いたしましたし

たるやうに御座り升
 佐「イヤ」屋敷檢分の時表門開きあつたる旨檢分役より上
 申に及んだぞ
 内「右夜討の節盜賊共是を奇貨として入込み候事測り難くと
 存じ連中より廻りの番の者を付け置きましたる處吉良
 殿の御家來表門を押破り逃出したし候に相違無之く吾々共が
 打破りました譯では御座りません
 佐「ウム……去年十二月十四日打入りの節夜中の事故火を持
 参いたしたるは勿論あるが提灯なるや將た何を用ひしやま
 た打込りの刻限は何時なりしや……
 内「打入りし刻限は子の半刻勿論火は一切用ひません十四日
 は月は白晝の如くまた雪明りにて右兩様を燈火の代りに用
 ひました御殿の内は燭臺に残りました燭燭を相用ひまして

御座り升
 佐「内藏之助一々申譯けをいたすが陪臣の身分を顧す御直參
 殊に高家の職たる吉良家に對し思ひの儘に舉動ふと云ふは
 公議を恐れざる致し方逆も罪科は免れんぞ
 内「ハ、ア尊命の通り陪臣の身分を以て公議御歴々に對し存
 分の働さ恐れ入り候得共君に仕る臣の身と致し候得ば高家
 は扱置さ天下萬鎮の諸侯たりとも主人の仇を其儘打棄て置
 き候儀は原の身として爲すに忍び走右に付き公議なら何様
 の嚴刑に處せられ候とも主人の存念を晴す身分不相應の働
 き誠に悦び入りまして御座り升
 土屋様
 相「内藏助の申分道理で御座る公議にもいたせ國持にもいた
 せ主人の敵を打棄て置くは武士道に無い内藏之助が云ふ處

義士銘々傳

行ふ處君臣の情態是に現はれ實に不惑の申立てある
 と被仰いまして、小笠原様が
 佐「ヤイ内藏之助其方は義を稱へて一天下の法を辨へん仇討
 を爲すに軍時に均しき飛道具は奈是用ひた
 内「飛道具のお咎めに候得共鉄砲は持参いたしません半弓五
 挺を持参仕りましたのは全く充分掛引きの爲では無い吉良
 殿若し早走りまたは堀堀を飛越さぬとも云へません故右用
 心の爲持参いたしましたのみに御座い升
 佐「ウム、内藏之助其方万事心を用ひたるやぞ申開きをいたし
 て居るが佐兵衛助宅より引き取りの節手鎗階子等其外半弓
 杯を取落し泉岳寺に逃去つたるは上杉より後詰の人数來ら
 んかど存じ臆病未練に見へたであらう然程命の惜くんば右
 様の儀をいたさんが宜しからず

義士銘々傳

内「是は異なる御問ひ、兵書に曰く夜戦夜攻め夜討夜盗四つに分
 けて御座い升右の通り夜討の砌り勝利を得ましたる證據に
 敵の敗軍跡へ味方の印しある武具を取残し引上げましたる
 のは武門の古き法に御座い升また敵の敗軍の後詰の兵器を
 奪ひ取り升は是侍道には分取りと稱へますが此上も無き是
 れ耻辱に御坐い升吉良殿へ推参いたし夜討勝を占めました
 る故古法に倣ひ味方の武器を勝戦さの證據に則ち御邸内に
 残して引揚げました譯合に御坐い升恐れながら狼狽へたか
 との仰せは何事、太平の御政治には御明君なれど武門の事は
 御暗い事と相見え升る
 と一本突込んだ佐渡守また赤面なざる聞て居らしつた稻葉美
 濃守殿が
 美「ア、ア佐渡殿最早巳の刻にも間も無し残りの箇條は後し

義士銘々傳

て是を定め御尋問あつて然るへく今日の評定は是迄……
と云ふ事に成つたから大石は

内「ホッ、ハッ、ハッ、」
と一息吐て澤村才八郎と共に御下けに成りままたが此方は御

老中方がまた御集會に成つて

美六箇敷い箇條は過日御尋ねに成つたが那の通り申開きを

して唯屋敷廻りの固めの人跡の事に就て取押へる處はあつ

たが其儘にいたして聞濟んで遣はして此後に尋ねる箇條は

モ一所謂彼が申開きの出来る箇條のみ残つて居るから再び

評定所を立てた處で内藏之助の辨舌で申開きは知れた事だ

何う爲たもんだらう

此折からに秋本但馬守が

但「十八ヶ條で大石を取押へるのは此りやア逆も行くまいか

義士銘々傳

ら何んでも此りやア政治に最負通願さへ無ければ徳川の政
權が亂れたと笑はれさへ爲なければ好いのだから赤穂浪人の
と吉良佐兵衛助の自分を入札に爲たら宜からう政治掛りの
者其の外御三家杯に入札を爲して開札をして多分に従つて
所致を付けたらば別に外様衆や國主が徳川の政治に非を打

ちは仕舞ひから……

一同「然ら然ら……」

と外に策が無いから一月二十七日に愈々其入札の札開きと相
成りました鳥渡其入札の光景を御覽に入れませう

第七十七席

其札開きの第一番は上屋相摸守様

此度淺野内匠頭の涙人共四十餘人吉良上野之介を討取り候

義士銘々傳

事御制定を破る者とは申し乍ら忠義の次第は神妙の至に付
當年より三ヶ年の間八丈へ遠島仰せ付けられ年限相立ち候は
い御免仰せ付けられ仕官勝手たるべき事吉良家は家名斷絶
勿論の事左兵衛之助は親類に御預け然るべきと存ぞ奉る
阿部豊後守

此度淺野内匠頭家來共神妙の至り後世武門の光りとも相成
るへきに付四十餘人の浪人は本家安藝守に御預け吉良左兵
衛助は相當の御處刑被仰付け然るべきかと恐れながら存念
申上げ奉り候

秋本但馬守
此度淺野家來共の働き忠節至極に付格別の御憐愍を垂れ御
宥免仰せ付けられ四家の諸侯へ下し置かれ可き事吉良左兵
衛助は家名斷絶は勿論當人は親類へ御預け然るべきと存じ

義士銘々傳

若年寄加藤遠江守

此度淺野家來の致し方忠義至極に付淺野大學儀を一万石と
爲し浪人共は右の家を下し置かれべき事吉良左兵衛助は家
名斷絶勿論の事當人切腹然るべきと存じ奉り候

寺社奉行永井伊賀守

此度淺野家來の働き未代臣たる者の龜鑑にも相成り候儀に
付大石内藏助は公儀お旗本に召出だされ若年の者共に武道
指南をも仰せ付けられ其餘の者共夫れ御家人に御取立て
あつて然るべきと存じ候事吉良左兵衛助は縛り首たるべき

町奉行松前伊豆守

此度淺野浪人四十餘人の者共精忠至極神妙の致し方に付御

褒美の上本家安藝守にお引渡し然るべし吉良左兵衛助は本領安堵たるべき事

斯の如く浪人を處せると云ふ入札は一ツも遣入つて居ない然

るに御三家の入札が残つて居りました此時尾州侯は御國故紀

州様ど水戸様の入札が残つて居りました紀州様の入札に浪人

を切腹と云ふ事は御座いませんが水戸様の入札が不味う御座

います其入札に曰く

法の天下の法なり四十餘人の者忠臣なりとて天下一統の法

を枉ぐべからせ殿中にて喧嘩口論白刃を振ふ者家名取潰し

の儀は東照宮以來天下の法あり是を枉ぐれば則ち天下の法

を破る者なり内匠頭家名断絶は勿論の事四十餘人の者天下

禁制の法を破り上野介を討取る其罪免すべからす由て切腹

申付くべき事昔鎌倉頼朝の時曾我兄弟父の仇工藤を討取り

義士銘々傳

子たりと雖も狩り場の狼藉法を破る罪ゆるすべからすつひに頼朝曾我五郎を死刑に行なわぬ誰か一人頼朝の無道を云はん又曾我兄弟の名天下に著るし諸役人此理を考へ見ヨ...と僅た一本の入札で何うしても死罪は免れんと云ふ事に成つて元禄十六年二月四日三田の細川越中守様へ城使として荒木重左衛門副使久我内記徒士目付七人御小人目付七人御出でに相成つて則ち切腹の儀を仰せ渡されました麻布の毛利甲斐守様方へ上使として鈴木次郎左衛門副使齋藤治左衛門徒士御目付五人御小人目付五人松平隠岐守様方へ鈴木幸右衛門副使として駒木根茂左衛門徒士目付五人御小人目付五人水野大監物殿へ上使として久具重左衛門副使として赤井平右衛門徒士目付五人御小人目付五人御出でに成つて皆切腹の儀を申渡しませした細川侯へお預けの分は

義士銘々傳

大石内藏之助、吉田忠左衛門、原惣右衛門、片岡源吾右衛門、堀部安兵衛、富森助右衛門、間喜兵衛、近松勘六、磯貝十郎左衛門、間瀬久太夫、小野寺重内、汐田又之丞、早見藤左衛門、奥田孫太夫、矢田五郎左衛門、武林唯七、大石瀬左衛門、奥田孫平、赤垣源藏、毛利甲斐守に預けられたる分、吉田澤右衛門、村松喜平、赤垣源藏、倉橋傳助、杉野十平次、間三六、前橋伊助、勝田三左衛門、不破數右衛門、伯賀彌左衛門、にて十人

松平隠岐守にお預けの分、大石主税、小野寺郷右衛門、堀部彌兵衛、木村岡右衛門、岡野金右衛門、中村勘助、千葉三郎兵衛、大高源吾、菅谷半之丞、岡島彌惣右衛門、にて十人

水野大監物へ御預けの分、神崎與五郎、間重次郎、奥田定右衛門、矢藤衛茂七、間瀬孫九郎、村松三太夫、茅野和助、横川勘平、三村次郎、左衛門、にて九人

義士銘々傳

此中に寺坂吉右衛門が這入つて居りませんが、是は死罪を免れ、て後に坊主に成つて播州華岳寺に浪人衆の心斗りの石碑を立て、て七十七歳迄、墓守を爲て相果てる。今此華岳寺の石碑も中々盛大に成つて居り、升扱て彌々切腹と相成り

水に映る花や、薬屑に浮かへて

散しを怨む庭の梅ケ枝

大石 眞雄

極樂の道は一筋君とて

阿彌陀をうへて四十八人

主 税 眞 金

かねてより君と母とに知らせんと

人より先に死出の山道

原 惣右衛門

先立ちし人は、ありけり今日の日は

途に旅路を思ひ出にして

富 森 助右衛門

合計四十六人

思ひきや我武士の道ならん

木村 岡右衛門

待て雲時死出の早足遅くとも

横川 勘平

さめて飲む茶屋はありけり

大高 源吾

草枕むすぶ假寝の夢醒めて

村松 喜兵衛

思ひ無く生過きたりと思ひしに

間 喜兵衛

六十九歳

斯の如く皆盡く辭世を殘して立派に切腹をいたして相果てました
したが今に至る迄忠義の名前は千歳不朽、今高細の泉岳寺に美

義士銘々傳

大尾

事に殘る義士の碑永らくの間看客諸君の御目を煩はしました
義士銘々傳も是にて終局と仕つります

3A-81

明治三十年八月十一日印刷
明治三十年八月廿一日發行



編輯者

發行者

印刷者

印刷所

義士銘々傳全五冊之内終卷
各一冊金二十錢郵税金六錢

東京市日本橋區鉄砲町十三番地

栗本長質

東京市日本橋區本石町四丁目四番地

大野喜六

東京市日本橋區本石町四丁目四番地

成功堂

東京市日本橋區鉄砲町十三番地

發行所

哲學書類發行
新版小說發行

一一三館

大賣所

東京
同同同同

大川
山近近
松

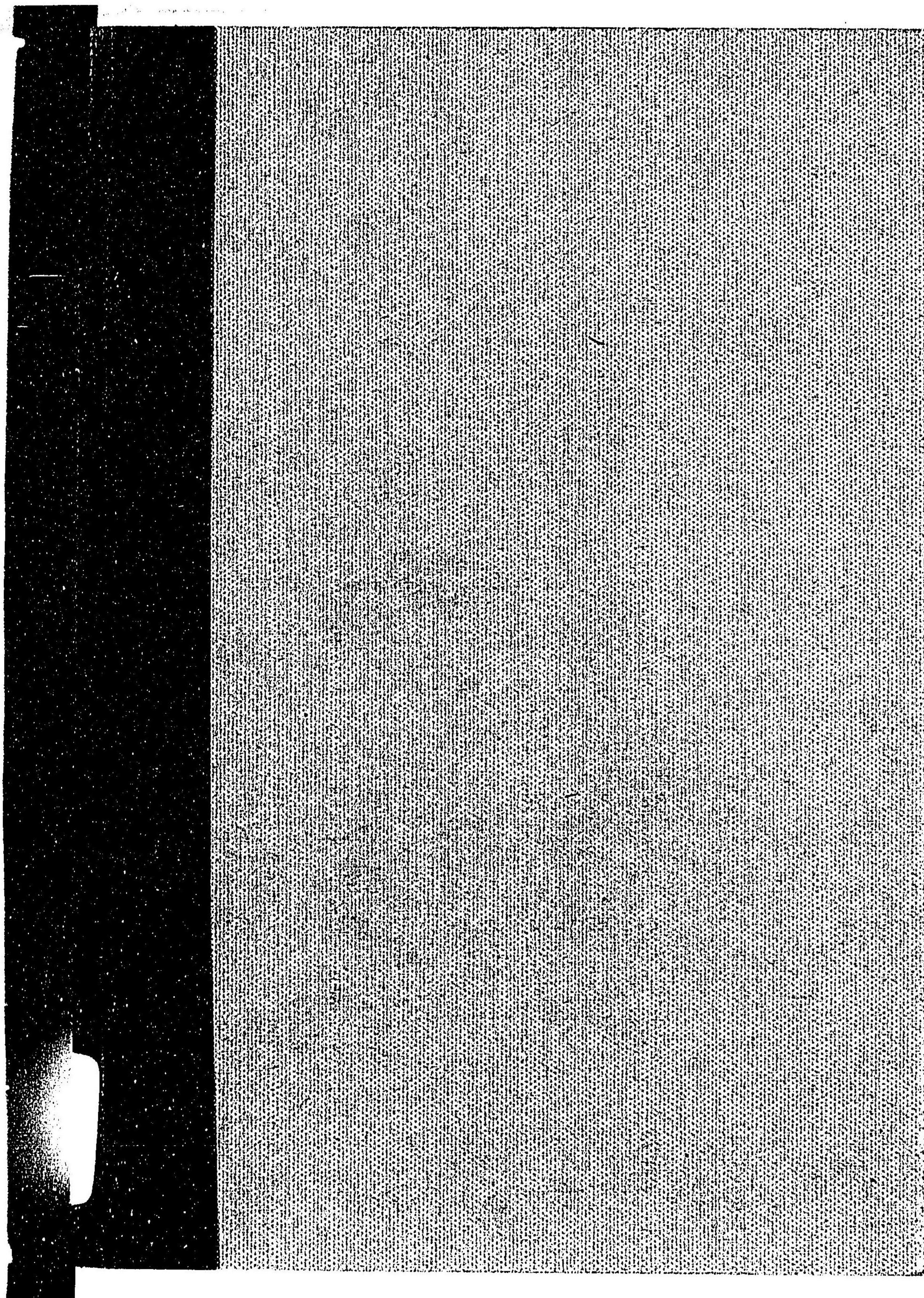
屋千
屋熊
久長
園名
村古

多田
長崎
西書
星昌

屋大
郎仙
店同
野甲
堂野

鐘佐
木美
柳正
萩原

堂美
文勘
堂書



義士銘々傳

国立国会図書館

093404-000-7

特54-676

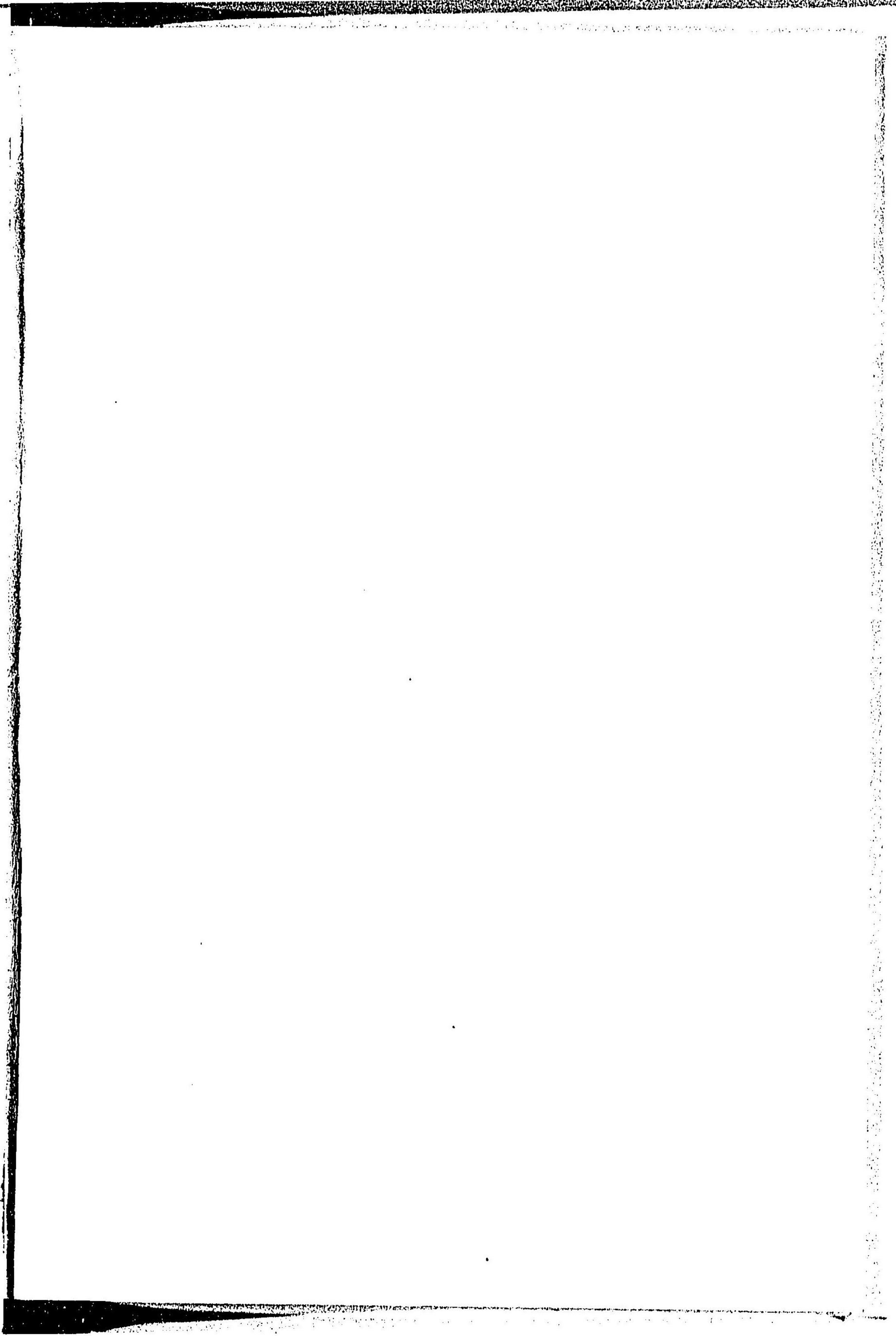
義士銘々傳

多田 省軒/著

M30

DBQ-0770





欠

MISSING